

ユネスコ無形文化遺産・

国指定重要無形民俗文化財

「鳥出神社の鯨船行事」調査報告書



北島組



中島組



南島組



古川町



例言

(一) 平成十四年度(二〇〇二)三月に刊行した『北勢鯨船行事調査報告書』(以下、『報告書』と略記する)は、四日市市及び楠町(当時は四日市市合併以前)、鈴鹿市に所在する鯨船行事に関するものを取りまとめたものであるが、富田の中島組についての項目が欠失している¹⁾。また、『報告書』を刊行してから二十余年の経過の間にも、種々の差異を生じてきている。

そこで平成二十八年年度より再度調査を行い、将来に亘って行事を継承していくための一助になることを願い、今般、ユネスコ無形文化遺産・国指定重要無形「鳥出神社の鯨船行事」調査報告書として刊行するものである。本書は、無形民俗文化財である限り、時代に応じた変更は避けられないものであることを念頭に、平成末から令和初頭に行われていた鳥出神社の鯨船行事の内容及び、四日市市が行った様々な事業²⁾について取りまとめ報告したものである。

なお、昨年度完成した映像記録・継承マニュアルとともに参照されたい。

(二) 本書の企画・調査・全般の執筆及び編集は、四日市市が行った。(平成二十八年年度～三十年度…社会教育課、平成三十一年度～令和三年度…社会教育・文化財課、令和四年度～四日市市シテイプロモーション部文化課)

(三) 令和元年度から三年度にかけて、四日市市と国立大学法人三重大学工学研究科建築学専攻の大井隆弘ゼミとの共同研究で実測調査を実施した図面も参照されたい³⁾。(下記二次元コード参照)



(四) 本書の写真は、主に四日市市、飯田秀則氏(エディングスタジオ)が撮影したものを使用している。

(五) 本書を執筆するにあたり、平成二十八年年度から七年間に亘り、各鯨船保存会のみなさまに格別のご協力をいただいた。本紙面を借りて深謝申し上げる次第である。

¹ 『報告書』第三章 国指定重要無形民俗文化財「鳥出神社の鯨船行事」の第二節・第三節・第四節で、それぞれ北島組・南島組・古川町について触れられているが、中島組についての記載は無い。はつきりとした理由は不明であるが、中島組は長期間に亘り、祭りに参加していなかった時期があるということから、その時期にあたっていたのかもしれない。『報告書』は、調査・執筆者が多く、調査した項目にかなりの差異があり、比較などが大変難しくなっている。また、実測図面については古川町を載せるだけで、それも台船は実測されていない。なお、当時行われていた決まり事や、よく唄われていた唄の歌詞なども変わってきていることが知られるため、平成末から令和初頭に調査した内容で本書を執筆するとともに、各組の歌詞について『報告書』収載された歌詞やその他の印刷物などにみられる歌詞も収載した。両者を比較すれば二十年余の間でよく唄われる唄の変遷なども知れることもできると思われる。²

² 平成二十八年度から実施した主な事業は次のとおりである。

平成二十八年度は、「ユネスコ無形文化遺産普及啓発事業」として、鯨船の準備・練習・山車の組立てなどから始まり、当該年の鯨船行事から、日本時間十二月一日（午前二時）にユネスコ無形文化遺産に登録されることが決まって、関係者が鳥出神社社務所に集合し、万歳し登録を喜び合うまでの記録映像を撮影した。また、四日市市文化会館第三ホールにおいてシンポジウムを開催した（登壇者…武蔵野美術大学教授 神野善治氏（当時）、鳥羽市文化財専門委員 野村史隆氏、民俗芸能研究家 鬼頭秀明氏と各組の会長四名）。また、登録を記念して、鯨船山車一艘（北島組神社丸）を四日市市立博物館一階エントラスホールに展示公開し、同会場において前述の記録映像を放映した。そのほか「見学と体験ツアー」を平成二十八年度・二十九年度の二年間続けた。また、広く普及させるため三カ国語（日本語・英語・中国語）によるリーフレットを作成した。

平成二十九年度は、「ユネスコ無形文化遺産普及促進事業」と名を改めて、以下の事業を行った。①ユネスコ無形文化遺産に登録されて初めての年となるため、それを記念して、大四日市まつり及び富田での本祭りにて、四艘の鯨船山車が勢揃いした。②祭りを発信するために「鳥出神社の鯨船行事」専用の独立したホームページを立ち上げた。③行事観覧者の利便のためB6版の街歩き用小冊子を作成した。④この年から行事の将来への継承のために、すべての組の鯨の製作に始まり、山車の組立て、太鼓や唄い、羽刺しの所作、祈禱や当日の化粧や着付け、祭りの構成要素である鎮火祭・町練り・本練り・宮参りの映像を撮影した継承マニュアルの作成に着手し、冊子印刷版とDVD十一枚を作成した。⑤平成二十九年度から二年間、中島組保存会会長である加藤正彦氏を講師として、将来の継承者たる人を育成することを目的にサポーター講座の開催を始めた。

平成三十年度は、街歩き用小冊子の増補改訂版、継承マニュアルの追補版（DVD三枚）、PRのための写真集の作成を行った他、サポーター講座や見学と体験ツアーを継続した。新規事業として、令和元年度から三年度にかけて、国立大学法人三重大学と四日市市との共同研究で、北島組（令和元年度）、古川町（令和二年度）、南島組（令和二年度）、中島組（令和三年度）の台船や装飾の実測調査を行った。

令和二年度・三年度は新型コロナウイルスの感染防止のため、祭り自体が行われなかった。

令和四年度は、継承マニュアルの完成版を作成し、冊子印刷とともに、全体の映像を収録しHPに掲載した。さらに、富田・富洲原地区に今も残る漁師町の町並みや、地区で行われる行事と社寺の関連性を、広く市民に知っていただくために、「魅力再発見！富田・富洲原文化財巡り」と称したウォーキングを開催した。

また、地元の取り組みとして、平成二十年頃より、行事の担い手育成と行事の魅力発信を目的として、保存会の有志が地域の小学校対象に、鯨船行事の歴史と行事の魅力を伝える授業を行っていた。令和元年度からは、鯨船保存会連合会が組織として引継ぎ、各鯨船保存会会長指導のもと、授業や練りの練習を行っている。地域の小学校である富田小学校には「富田丸」と呼ばれる鯨船がある。³

³ 三重大学との共同研究で、富田の鯨船四艘の実測調査を次のように行った。令和元年度は北島組神社丸の台船及び装飾具。令和二年度は古川町権現丸の台船及び『報告書』の修正・縮尺の調整、南島組感應丸の台船及び装飾具。令和三年度は中島組神徳丸の台船及び装飾具。

研究代表者…三重大学大学院工学研究科建築学専攻 助教 大井隆弘氏

研究協力者…三重大学名誉教授 菅原洋一氏

研究補助者…原理花子、越野景子、荒木菜月海、大河原剛、竹本調、谷口賛、（大学院）

荻野真雪、田宮もも、中島宏徳、大北拓真、那谷空良、廣瀬達也、鈴木航大、小川聖平（学部）

古川町権現丸については、既に『報告書』において設置部材の図化が行われているが、船体の詳細な実測調査が実施されておらず、掲載されている設置部材の図面も縮尺が判然としない課題があった。そこで、本研究では下記の三点に取り組んだ。

①船体を実測し図面を作成すること。②既往調査で作成された設置部材の図面の縮尺を調整すること。③船体及び設置部材を総合的に把握可能な資料としてまとめること。

第一章 鳥出神社の鯨船行事について

一、行事の概要	1
二、祭日の由来	2
三、鳥出神社	3
四、ユネスコ無形文化遺産登録に至る経緯	5
五、その他の鯨船行事	7
六、由来	9

第二章 各鯨船組の組織

一、組織	13
二、鳥出神社と鯨船組の関係	14
三、組織の構成	14
四、各組の組織	24

第三章 鯨船の構成要素

一、台船	29
二、装飾	29
三、鯨製作	33
四、乗り手と練り手	39
五、唄いと歌詞	41
六、提灯台	48
	66

第四章 祭礼行事

一、事前練習	69
二、鎮火祭	69
三、町練り	71
四、本練り	73
五、浜練り	77
六、宮参り	80
	81

終わりに

82

実測調査の成果

83

第一章 鳥出神社の鯨船行事について

一、行事の概要

鯨船行事は、北勢地域にのみ分布する、陸上で行われる模擬捕鯨行事であり、鯨を大漁や豊饒の象徴として見立てている民俗行事である。

「鳥出神社の鯨船行事」は、毎年八月十四日と十五日に開催される鳥出神社の例祭への奉納行事である。鳥出神社の鯨船行事には北島組・中島組・南島組・古川町の四つの組¹があつて、それぞれ、神社丸・神徳丸・感應丸・権現丸の名をもつ鯨船山車を一艘ずつ所有している。

十四日の朝には、「鎮火祭」が行われる²。北島組↓中島組↓南島組↓古川町の順³に行われ、各組の町衆が町ごとに真竹（地元ではこの竹及び松明も笹竹と称している）に麦わらの作り物（保駄とか菰とも）を吊るした松明を担いで神社に入り、境内中央に並べてから、本殿に上がり祈禱を受ける。本殿で組ごとに町の平安と行事の無事を祈願して、行事に使用する衣装や道具も含めてお祓いを受ける。神事が終わると神職より御神火を受け取り、その火を持参した松明に移し、大きく燃え上がるのを見届けると、各町内に戻って山車蔵を出し、「町練り」を行う。

町練りとは、各組の町内で練りを行うことである。「練り」とは、鯨船で鯨突きの演技を行うことをいう。最初に突く場所は組により異なるが⁴、練り受けといって祝い事があつて祝儀を出した家や、自治会長の家などを突く「役突き」、羽刺

しや櫓漕ぎなどを出した家でも鯨突きを行う。鯨突きを行う家には目印である梵天⁵が立てられる。

この鯨突きは、「流し唄」を唄いながら鯨を捜すところから始まる。羽刺しが沖の鯨を発見すると「上がる」などの合図の声が掛けられ、唄が「役唄（上げ唄ともいう）」に替わり、唄や太鼓のリズムに合わせて逃げる鯨を追いかける。追い詰められた鯨は反撃に転じ、鯨船は大きく後退させられてしまう。このような攻防の末、体勢を整えた鯨船が最後には見事に鯨を仕留めることに成功する。鉾を打たれたハリボテの鯨は、頭を右↓左↓中と振って頭を高く放り上げて走る。鯨を仕留めた鯨船は船尾を持ち上げ（艫上げ⁶）、神に感謝するという一連のストーリーに沿って行われる。多くの祭礼行事は、唄いや鳴り物が中心となつて粛々と進められるが、唄いと太鼓に加えて一連のストーリーが表現される所に鯨船行事の特徴があると言える。狭い街中で行われる町練りでは、基本的に練りを行う場所で鯨が逃げ出すことはなく、一発で仕留められることが通常である。例外として、古川町の町練りの最後に、中央通り（三重県道8号四日市鈴鹿環状線、地元での通称は富田中央通り）で行われる多度大社への突きがある。この中央通りは道幅が広く鯨が暴れ回るのに格好の場所となる。そのため、何度となく鯨が逃げ出しては追い詰める、ということを繰り返し、最後にようやく鯨を仕留める。しかし、その回数に決まりがあるわけではない。そして、古川町の最後の艫上げは、艫を持ち上げたまま百八十度回転させるという技が披露され、町練りの中では最も盛り上がりを見せる。翌日の本練りとともに鯨船行事の見所の一つと言える。

十五日の「本練り」は、鎮火祭と同様の順で北島組から始まる。まず鳥居で一本突いてから境内に入り、練りを行う。本練りは、決められた時間内に演技が行われ、北島組・中島組・南島組のハマの三組は本殿と蛭子社⁸を突くが、タカ⁹の古川町は本殿のみを突く。南島組を除く三組は、退出する時に鳥居を船首からくぐって退出するが、南島組だけは本殿を向いて船尾から鳥居をくぐって退出し、そのまま中央通りまで後ろ向きに下がって行く。これは、神に尻を向けないという配慮だという。

ハマの三組は、本練りが終わるとそれぞれの浜で伊勢湾に沿って南北に練りながら「浜練り」¹⁰を行い、南向きに伊勢神宮と、北向きに多度大社に向かって鯨を突く。浜を持たない古川町では、十四日の町練りの中で、始めに山車蔵（各組によって倉庫や格納庫などと呼び方が異なっているため、以下山車蔵で統一する）を突いた後、十四川にかかる網勘橋の所で南を向いて伊勢神宮に向かい鯨突きを行う。町練りの最後に中央通りの町域最西端で多度大社を突くが、浜練りは行わない。各組は、練りが全て終わると、鯨船山車を山車蔵に納める。その後、北島組から順に、提灯を提げ太鼓を叩きながら道中伊勢音頭を唄い、鳥出神社へ向かう。路上や神社境内で円陣を組んでぐるぐる回る所作を繰り返し行うなどしながら、順に鳥出神社を訪れる。本殿に参拝し、行事が無事終了したお礼を行う「宮参り」をすることで、全ての行事が終了となる。

なお、古川町は毎年行事に参加するが、ハマの三組は基本的に二年参加すると一年休むこととしており、組の事情が重なって古川町と合わせても二艘しか出ない年などもあった。基本的に四艘

が揃って参加することはない。しかし、平成二十六年には、ユネスコ無形文化遺産の登録が延期され、氣勢をあげるために四艘が参加したこともあった。また、ユネスコ無形文化遺産の登録決定が平成二十八年の十二月であったため、翌年の平成二十九年などは、大四日市まつり¹¹及び鳥出神社での本練りも、ともに四艘揃って参加するようなこともあった。

ハマの三組が二年出て一年休むというのは、一度鯨船を出すと百万円以上の予算¹²が必要となるため、三年に二回ぐらいでないとするに苦しいという懐事情があるらしい。古川町については、『四日市市史』第五巻史料編 民俗（平成七年）では「氏子数の多い古川町は毎年出している」としているが、令和二年時の世帯数は、北島組は210軒、中島組52軒、南島組231軒、古川町165軒となっており、中島組は圧倒的に少ないが、古川町は、北島組と南島組より少なくなっているので、今では従来からの慣習として行われていると言わざるを得ないであろう。

二、祭日の由来

鯨船行事は、毎年八月十四日と十五日の二日間開催される。理由はわからないが、昔はとか、戦前にはとか、前置きがあったうえで、九月二十三日に行われる鳥出神社の「がに（蟹）祭り」の時に行われていたものが、いつからかお盆に行われるようになったという話がある。しかし、現在聞き取りした限り、「がに祭り」の時に行われたことを実際に知り得る者はいなかった。加えて、『報告書』で記載したように、「祭日の移動については、現在、聞

き書きで聞きうる範囲内ではないようである。」としており、大正六年の鯨船の記念写真が八月に撮影されていることも記されている。なお、『報告書』には聞き書きとして、

「文久生まれの祖母の父の時代には、九月二日から一四日の祭日であつた。」

との伝承を記している。日付が異なることにも違和感があるが、文久の九月十二日から十四日であれば、伝承の時代には一ヶ月前の八月中に行われていたということになる。現在の八月の祭日は、もともと旧暦の七月の盆行事が、新暦の盆行事に移行した際に、何らかの祭日の移行の伝承が出来上がったのかもしれない。

各組での聞き取りでは、祭りが「昔は三日間だった」ということを確認し得たところである。戦前戦後の変革でも変わらないものが、いったいどのような事態が生ずれば変更になることがあるのであろうか。『報告書』でも述べている通り、富田地区は基本的に漁師町であるため、

「戦前の漁業形態では、盆までアミ（網々）という五・六人単位で船に乗り、シラスやコウナゴを獲る漁業が、盆を境にしてアグリ（巾着網）によってヒシコ（片口鯛）を獲る漁法に替わる。巾着網漁は、二、三杯の船と四〇〜五〇人が参加して行われる大規模なものであったという。つまり、盆は富田地区では漁閑期にあたる時期であるといふことができ、盆だから祭りを行うというよりも、盆の時期が漁閑期にあたるから、多くの人々を動員する祭りが行い得たという理解も可能になる。」

としているのが当を得ているのではないかと思われる。

他にも、富田一色のけんか祭りや天ヶ須賀の石取祭は同じ日付に開催されていて、理由はお盆が漁閑期という漁師町特有の事情によるものであろう。

この祭日は、現在にあつては少子高齢化の町、特に中島組においては、お盆に帰省する子や孫、親戚たちの存在抜きには祭りが成立しない状態となっており、現代に適応していると言えるであらう。

三、鳥出神社

鳥出神社は、延喜式の神名帳に登録されるいわゆる延喜式内社で、創始年代は詳らかではないが、『延喜式神名帳』伊勢国朝明郡二十四座の一つとして、主祭神日本武尊を祀る。古来、朝明地方における中心的神社として崇敬せられ、江戸時代には「富田六郷の総氏神」、すなわち東富田、西富田、松原、富田一色、天ヶ須賀、蒔田六村の氏神として尊崇された。熊野信仰にかかわり若一権現としても信仰を集めていた。安永年間（一七七二〜八二）、火災に遭い古伝を焼失したとされるが『大日本史』には、

「鳥出神社（今在東富田村飛鳥明神）に伝言、祀日本武尊、日本武尊世、葬能褒野神靈化白鳥、白北域出而飛去」と記載されている。

また、本居宣長の『古事記伝』には、

「神名式に朝明郡に鳥出神社あり、或説に此れ、倭建命の白鳥と化て飛出給ひし地なる故に、鳥出とは言なり、今は此のあたりを富田

と言ふは、登利伝を訛れるべし。」
としている。

明治三十九年（一九〇六）には、神饌幣帛料供進神社に指定され、大正三年（一九一四）、当社祭神中、事代主神、速玉男命とあるのを日本武尊、事代主命に訂正許可を願い出て認可されて現在に至っている。

明治四十一年には、境内社三社大神社（天照皇大神、應神天皇、天兒屋根命）他、蛭子社などの大小祠を合祀した。同四十二年、村社若宮八幡神社（大鷦鷯命）、無格社山神社（大山祇命）を合祀し、同年、村社茂福神社（建速須佐之男命、天照大御神、保命神、猿田彦命、大宮能賣命、上筒男命、中筒男命、底筒男命、大山祇命）を合祀したが、昭和二十五年（一九四五）に、茂福神社を再建するにつき上記、建速須佐之男命以下の祭神を分祀した。



現在、鳥出神社の記載では、主祭神…日本武尊、事代主神、配祀神…天照大御神、天石戸別神、蛭子命、宇迦之御魂命、応神天皇、大鷦鷯天皇、天兒屋根命、波邇夜須毘古神、波邇夜須毘賣神、大山祇神、菅原道真とされている。

当社の造営に当たっては、天正十三年（一五八五）以来、神宮の式年遷宮毎に古材を拝領して行われる古例があり、現在の本殿は昭和四年、内宮月讀宮の古殿用材の拝領したものであり、また、

で¹³、朱と黒漆で彩色し、船体上部を総矢倉で囲み、内部に金彩で鳥出神社の神紋の三つ巴を配している。また、矢倉上部に太鼓楼を設け、その横幕にも三つ巴の刺繍を施し、車立に帆柱を寝かした三十二挺艫の軍船の雛型である。

二隻の製作年代は未詳だが、前者の収納箱に、天明元年（一七八一）八月吉日 藤原朝臣直紹所有の墨書があり、江戸時代中期に遡って所有されていたことが分かる。



関船雛型



小早雛型

四、ユネスコ無形文化遺産登録に至る経緯

平成元年二月に、四日市市富田の鳥出神社の鯨船行事、南納屋町の鯨船山車明神丸（三重県指定有形民俗文化財）、磯津の鯨船行事、南楠鯨船行事、そして尾鷲市梶賀のハラソ祭りの五つの民俗行事が「北勢・熊野の鯨船行事」として一括で「記録作成等の措

昭和四十八年には、外宮の宿衛舎内玉垣御門の用材を、平成五年には鳥居を拝受しているという。

主な祭祀は、元旦の歳旦祭、七月二十日の蛭子祭り、八月十四日の鎮火祭、十五日の例祭、九月二十三日蟹祭りがあり、鳥出神社の鯨船行事は八月の例祭に奉納される行事である。

なお、当社の社家は累代世襲で、現在の宮司で十五代。喜多嶋姓を名乗り、『喜多嶋家系図』によると、大織冠鎌足公三十三世吉野中納言 藤原正高卿三男從四位上直一に始まるという。この系図は実見していないが、当社は正応元年（一二八八）と安永九年（一七七二）の大火によって、古文書を消失したと伝えられている。

宝物

神社の宝物の中に、四日市市指定有形民俗文化財の「奉納御座船模型」（平成十五年八月二十一日指定）二隻があり、この奉納が鯨船行事の由来に関わるとの伝承があるので、ここに記しておく。一隻は「関船」という比較的大型の軍船の雛型で、安宅船が禁止されてからは船団の基幹船となったものである。

雛型の長さは一九九cm、朱と黒漆で彩色し、五尺（波除け）と垣立は金箔彩、船体上部を総矢倉で囲み、内部廊の内側に御座の間と次の間を設け、金彩の唐獅子の装飾を施す。矢倉上部にも座を設け、水押には銅板の龍飾りとサガリを付けた、帆を持つ六十四挺艫の関船で、將軍や天皇、大名などが乗る御座船としても用いられたものの体裁である。

もう一隻は、長さが一八二cmの「小早」と呼ばれる少し小型の軍船

置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されている。その後、鳥出神社の鯨船行事は平成四年二月に、磯津の鯨船行事は平成七年六月に、南楠鯨船行事は平成八年八月に、それぞれ四日市市の無形民俗文化財に指定されている。

また、鳥出神社の鯨船行事は、国の指定基準「（一）由来、内容等において我が国民の基盤的な生活文化の特色を示すもので典型的なもの」であるとして、平成九年十二月に国指定重要無形民俗文化財に指定されている。

さらに、平成二十八年十二月一日（日本時間）、ユネスコの無形文化遺産保護条約第十一回政府間委員会（於…アデイスアベバ・エチオピア）において、全国三十三件の「山・鉾・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に正式に登録された。

登録が決定すると、地元保存会の人々は一応に歓びを口にするともに、「長かった」と漏らしていた。登録に至ったその裏には、ユネスコの運用方針に翻弄されながら登録まで漕ぎ着けた文化庁の奮闘があった¹⁴。

「山・鉾・屋台行事」として全国三十三の国指定重要民俗文化財が一括でユネスコ無形文化財に登録されるまでには、次のような過程を経てきている。

○平成二十一年九月、第四回政府間委員会（アブダビ・アラブ首長国連邦）において「京都祇園祭の山鉾行事」及び「日立風流物」がユネスコ無形文化遺産に登録される。

○平成二十三年十一月、第六回政府間委員会（バリ・インドネシア）において「秩父祭の屋台行事と神楽」及び「高山祭の屋台行事」について「情報照会」の決定がなされる。

○平成二十六年三月には、計三十三件の国指定重要無形民俗文化財を「山・鉾・屋台行事」としてグループ化した提案がなされている。

○平成二十六年六月には、無形文化遺産の登録がない国の審査を優先するという国際ルールに基づき、日本の審査は一年先送りされることとなった。

○平成二十七年三月、三十三件の国指定重要無形民俗文化財「山・鉾・屋台行事」のグループが再提案されている。

○平成二十八年十月には、「山・鉾・屋台行事」について評価機関より代表的な一覧表への「記載」の勧告がなされた。

○そして十二月一日、第十一回政府間委員会において、「山・鉾・屋台行事」について、人類の無形文化遺産の傑作として「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に「記載」が決議された（現地時間十一月三十日）。

このように、鳥出神社の鯨船行事の関係者からすると、平成二十六年三月の「山・鉾・屋台行事」としてのグループ提案から二年八ヵ月ほどが経過したこととなり、まさに待ちわびた登録ということになる。

文化庁は、ユネスコ無形文化遺産登録の要旨を次の四点にまとめている。

○「山・鉾・屋台行事」は、地域社会の安泰や災厄防除を願い、地域の人々が一体となり執り行う、各地域の文化の粋をこらした華やかな飾り付けを特徴とする「山・鉾・屋台」の巡行を中心とした祭礼行事である。

五、その他の鯨船行事

前述の通り、鯨船行事は、陸上で行われる模擬捕鯨行事であり、北勢地域（北伊勢地域・三重県の北部）のみで行われているものである。四日市市には、鳥出神社の鯨船行事含め、南納屋町の明神丸、磯津の大正丸、南楠の龍神丸、本町商店街振興組合によって復活された新勢州丸の計八艘がある。また、鈴鹿市域にも長太の天王丸の一艘が現在伝えられている。過去に遡れば、四日市市には北納屋町の勢州組、東袋町の正一丸、鈴鹿市は四ツ谷の長一丸の三艘があり、十指に余る数の鯨船がこの地域だけに存在したのである。

◆鯨船山車（明神丸）（三重県指定有形民俗文化財…昭和三十一年指定）、保持者…南納屋町鯨船山車明神丸保存会

諏訪神社¹⁶の祭礼、四日市祭に奉納される行事で、その起源は富田の鯨船と同様に江戸時代に遡る。また、四日市市を代表する祭礼行事として大四日市まつりにも参加している。この諏訪神社に奉納される鯨船は、本来南納屋町の「明神丸」の他に、北納屋町には「勢州組」、袋町には「正一丸」があった。ただし、山車としての勢州組のものは塩浜地区の七つ屋町へ譲渡され、一部改装修理されたのち、「勢州丸」（のちに「新勢州丸」に改称）として御菌神社の祭礼行事に用いられていた。現在、「新勢州丸」として伝えられている。

明神丸は他の鯨船同様に絢爛豪華な造りとなっており、水押にサガリを付け、五尺には華美な彫刻に金箔を押している。また、

○祭に迎える神霊の依り代であり、迎えた神をにぎやかし慰撫する造形物である「山・鉾・屋台」は、木工・漆・染物といった伝統的な工芸技術により何世紀にもわたり維持され、地域の自然環境を損なわない材料の利用などの工夫や努力によって持続可能な方法で、幾世にもわたり継承されてきた。

○「山・鉾・屋台」の巡行のほか、祭礼に当たり披露される芸能や口承に向けて、地域の人々は年間を通じて準備や練習に取り組んでおり、「山・鉾・屋台行事」は、各地域において世代を超えた多くの人々の間の対話と交流を促進し、コミュニティを結びつける重要な役割を果たしている。

○「山・鉾・屋台行事」のユネスコ無形文化遺産代表一覧表への記載は、コミュニティが参画した持続可能な方法での無形文化遺産の保護・継承の事例として、国際社会における無形文化遺産の保護の取組に大きく貢献するものである。

こうして、全国三十三件の国指定の重要無形民俗文化財がユネスコ無形文化遺産に登録されたが、これらはみな国の指定を受けた文化財であり、県・市指定無形文化財や未指定無形文化財は含まれていない。無形文化遺産保護条約の精神からすると、これで行われていないことや、ユネスコ無形文化遺産に登録されたことによる当事者たちの意識の変化や問題点などについては、すでに識者たちの指摘するところである¹⁵。

緋羅紗に金糸・銀糸の二見夫婦岩の刺繍が施された横幕も見事である。他にも、金糸の屋形屋根幕をいただく屋形や船名の扁額を掲げる艫立など、総じて豪華な装飾を施した鯨船山車である。明神丸の大きな特徴としては、水押御紋から艫の塵までの全長が約8900mmと、最長の鯨船山車となっていることである。

この絢爛豪華な明神丸は、四日市祭の練り物と同様に戦争の被害を受けている。しかし、幸いにも飾り物を個人に預けていたため、台船以外は空襲の被害を免れている。戦後に町民の寄付を募り、昭和二十二年には山車が復活し、同年の四日市祭に参加することとなった。その後も、地域住民や保存会に大切にされ現在まで至っている。



明神丸 町練り



明神丸 鯨被り

◆磯津の鯨船行事（大正丸）（四日市市指定無形民俗文化財…平成七年指定）、保持者…磯津鯨船保存会

塩崎神社の大祭に奉納する行事として、大正年間に導入されたため、大正丸と名付けられている。山車自体は四日市祭の正一丸

が前身で、袋町の正一丸が大正期に新たに造り替えられた際に、その古手の正一丸を購入したものである。

張りぼての鯨と鯨船の攻防や演技全体は、他の鯨船行事とほぼ共通する。塩崎神社の祭礼は九月二十一日と二十三日であり、二十二日が町練り、二十三日が神社への練り込みとなっている。戦後、一時期中断していたが昭和六十二年から保存会によって復活した。その後、担い手不足などの要因により平成十四年から休止が続いていた。地元の人大切にされてきた鯨船行事を復活させようという機運が高まり、令和二年九月に保存会を再度設立した。令和四年九月二十四日に、保存会の熱意によって二十一年ぶりとなる行事が行われた。



大正丸 扁額



大正丸 町練り

◆南楠鯨船行事（龍神丸）（四日市市指定無形民俗文化財…平成八年指定）、保持者…南楠鯨船保存会

南御見東神社の祭礼に奉納される行事で、明治期から行われてきたと伝えられている。現在の台船は、昭和二十二年に四日市の

四日市の祭りや鯨船を愛する人々の熱意によって復活の道を歩んでおり、諏訪神社の例祭である四日市祭にも奉納されている。

◆長太鯨船行事（天王丸）（鈴鹿市指定無形民俗文化財）、保持者…長太鯨船保存会

飯野神社への奉納行事である。古くは、宮本の天王丸と四ツ谷の長一丸があったが、長一丸は人手不足などの理由で明治中期から中断している。天王丸は、八月一日に行われている北長太地区の氏神である飯野神社の祭礼「天王祭」で行事が行われていた。しかし、昭和十八年に戦火が激しくなったことにより中断することとなった。昭和四十一・四十二年に地区の青年団が再興を試みたが、費用や後継者不足の問題により断念された。その後、平成二年に文化庁が視察に来たことを契機に、再び行事開催の機運が高まり復活することになった。

現在は、天王祭とは関係なく十月の第一土曜日と日曜日に行われている。また、その組織も天王祭のように町単位ではなく、北長太町全体で構成された保存会となっている。

山車の装飾は、サガリは緋羅紗に刺繍し、先に金糸の房を付けたものとなり、五尺は金箔を押した彫刻を施し、四日市の山車にあるような横幕は省略され、屋形や艦立も比較的簡素なものとなっている。

以上、現存する鯨船山車は九艘を数える。かつては四日市市の東袋町に「正一丸」、鈴鹿市の飯野神社に奉納する四ツ谷の「長一丸」もあったが今は行事が行われておらず存在していない。一方、

安田造船所で造られたものであり、幕や飾りなどには昭和五十一年に大規模な修繕が施されている。

昭和二十二年以前の台船は、南納屋から譲渡されたものと伝えられている。その大きさや形状、装飾の華やかな様子は明神丸と大差はない。



龍神丸 扁額



龍神丸 町練り

◆新勢州丸

明治三十八年、北納屋の「勢州組」の鯨船が七ツ屋町に譲渡され、「新勢州丸」として御蘭神社の祭礼行事に用いられていたが、昭和三十七年を最後に休止していた。その後、老朽化により廃棄されようとしていたが、平成二十六年六月、四日市本町商店街振興組合に譲渡され、一部修理を経て、同年八月の「大四日市まつり」で半世紀ぶりに曳き回された。



新勢州丸 鯨船山車

四日市の北納屋の勢州組は、七ツ屋町を経て本町商店街振興組合に譲渡され現存している。本来、この四日市市を中心に鈴鹿市の一部を含めた地域に、十一艘の鯨船が存在していたことが分かっているが、元を正せば本来的に鯨船が存在したのは、四日市町と富田に限られる。以外の地域は、いずれも四日市町の鯨船が譲渡され、練りなどが伝承されたものである。

六、由来

鯨船の由来については判然としないが、安永年間（一七七二～八一）のものといわれる四日市町の各町の黎（カ）一覽の中に「鯨つき」の名称がみえていることから、由来をおおよそこの頃に置くことが出来る。この頃の鯨船は質素なものであったと言われており、明治二十三年（一八九〇）の『伊勢新聞』に掲載された記事の後日談として、次のようなことが記されている。

当時の鯨船は、竹で作り、屋形もなく装飾も華美ではなく、祭りが終わるとすぐに壊して売却することとなっていたが、袋町の岩田久八という人物が一年間鯨船を預かっておいて漆を塗って祭礼に出たところ、皆がその美しさに驚き、他の二町が面目を失ったこと、またその翌年には南納屋町・袋町（北納屋の誤りか）も同じく漆を塗って出てきたこと、それ以来相競って今日のような美観を呈するにいたった。

つまり、袋町の鯨船が漆を施して祭礼に参加した翌年から、他

の二町も同じように飾り立てて参加し、次第に競って華美な装飾を施し今のようになったというのである。

富田の鯨船については、鳥出神社が火災に遭って資料が残っていないため、詳しい由来はよく分らないところである。ただし、北島組の装飾箱に嘉永六年（一八五三）、中島組の装飾金具に文久四年（一八六四）の年号がみえている。この銘が、造船銘なのか、修理銘なのか判断は迷うところであるが、いずれにしても、一八五〇～六〇年代に鯨船が存在していたと言える。



北島組 装飾箱

古くは、ハマの三組（北島組・中島組・南島組）は、北組・中組・南組と言っていたようである。今でも略して北組、中組などと言っていることがある。

² 鎮火祭自体は、本来六月・十二月の晦日の神祇祭祀であり、火菰を作成し、それを鯨船組の町ごとにそれを神社に持参しているところに旧来の形式の一部が残されている。現在、鎮火祭に参加しているのは、鯨船組の各町と富田西町の石取祭のみである。

³ 本来の順番は、北島組から始まり、中島組↓南島組↓古川町の順であるが、ハマの三組は二年出て次の年は休むことを原則としているため、ハマの順番はそれによって異なる。また、最後に行われる宮参りは時間が遅くなることや、石取祭と日程が重なったりするため、古川町が「宮参り」を行わなかった時期もあったという。そのため、各組の公平を期すため、くじ引きで順番を決めていた時期もあるというが、現在は基本である北島組↓中島組↓南島組↓古川町の順で行われている。

⁴ 北島組は、北側の新町二区から南の北魚町まで順番に突く。中島組は、二筋ある通りに設けられた提灯台を突いてから、その筋の町練りを行うが、順番は毎年交代する。

南島組は、北の筋から突く年と南の筋から突く年を交互に決めている。

古川町は、船を出すと、まず山車蔵を突いてから、網勘橋で南を向いて伊勢神宮を突き、近くの桜木神社（山の神）を突くことから始まり、続いて近くから祝儀突きを行っていく。⁵ どの組も同様に梵天と称しているが、北島組と南島組は、それぞれに「北島組 神社丸」、「鯨取 南島組」と書かれた板材に柄を付けた形式のものをを用いており、漁師町ゆえ、漁に使う浮標（ブイ）に由来するとされる形状のものをを用いている。中島組と古川町は、布状のものに「鯨取根元 神徳丸」、「鯨取元祖 古川町」と書かれた旗状のものを柄の上部から延ばした紐で下げたものを用いている。

⁶ 艫上げは、鯨を捕ることができたことを神に感謝する行為という説や、大漁のしるしで、獲物の重みで艫先が下がる様子を表現して

いるという説がある。

⁷ 四艘が参加した平成二十九年の予定で見ると、北島組が十時～十一時三十分、中島組が十一時三十分～十三時、南島組が十三時～十四時三十分、古川町が十四時三十分～十六時とそれぞれの持ち時間は一時間三十分となっている。事前に鳥居を突いて、一時間半かけて境内で二本突く。北島組、中島組、南島組の三組は本殿と蛭子社を突き、古川町は本殿を一時間近く掛けて突く。但し、古川町は最後になり、時間があるため八時半ごろから中央通りで顔見世を行い、前日の町練りで回り切れていない家での突きを行う。なお、北島組も本練り後、浜練りまでの間に、前日の町練りで回れなかったところを突いている。南島組は本練り終了後、地域貢献ということで、浜練りの前までに富田浜病院で入院患者などの慰問のため鯨突きを披露することもある。

⁸ 本殿右手に蛭子社が配置されている。旧社地、東富田公園内には北側隅に石柱が建てられている。

⁹ タカとは、浜から離れた高い地区の意味。

¹⁰ 中島組と南島組は町域の東橋の筋（もとの浜が僅かに残され駐車場として利用されている場所の通り）で行われ、北島組はもとの浜が利用されているため一筋西側の通りで行われている。

¹¹ 江戸時代から続く諏訪神社の例祭である四日市祭とは別に、昭和三十九年（一九六四）から始められた市民祭。毎年八月の第一土曜日・日曜日に開催される。初日（土曜日）は「おどりの日」と題して市民参加の踊りなどを中心とする。二日目（日曜日）は「郷土の文化財と伝統芸能」と題して市内各地の祭礼行事を紹介する。

¹² 令和二年中島組への聞き取りでは百二十万円かかるという。

¹³ 江戸時代には、経費のかさむ大型の「関船」に替わって、「小早」が正規の軍船の地位を占めることも多くなっていた。

¹⁴ 『文化遺産の世界』Vol.28 石垣悟『無形文化遺産の国際的保護と日本の文化財保護制度―山・鉾・屋台行事』の記載決定を受けて―』(https://www.isan-no-sekai.jp/feature/201701_01 二〇一七年三月)。

¹⁵ 福原敏男氏『提案されなかった「山・鉾・屋台行事」―今後に向けての期待―』文化遺産の世界 特集 VOL.28 など。

https://www.isan-no-sekai.jp/feature/201701_08 (令和五年十二月確認)

清水博之氏「ユネスコ無形文化遺産『山・鉾・屋台行事』の実相と向後」文化遺産の世界レポート

<https://www.isan-no-sekai.jp/report/7249> (令和五年十二月確認)

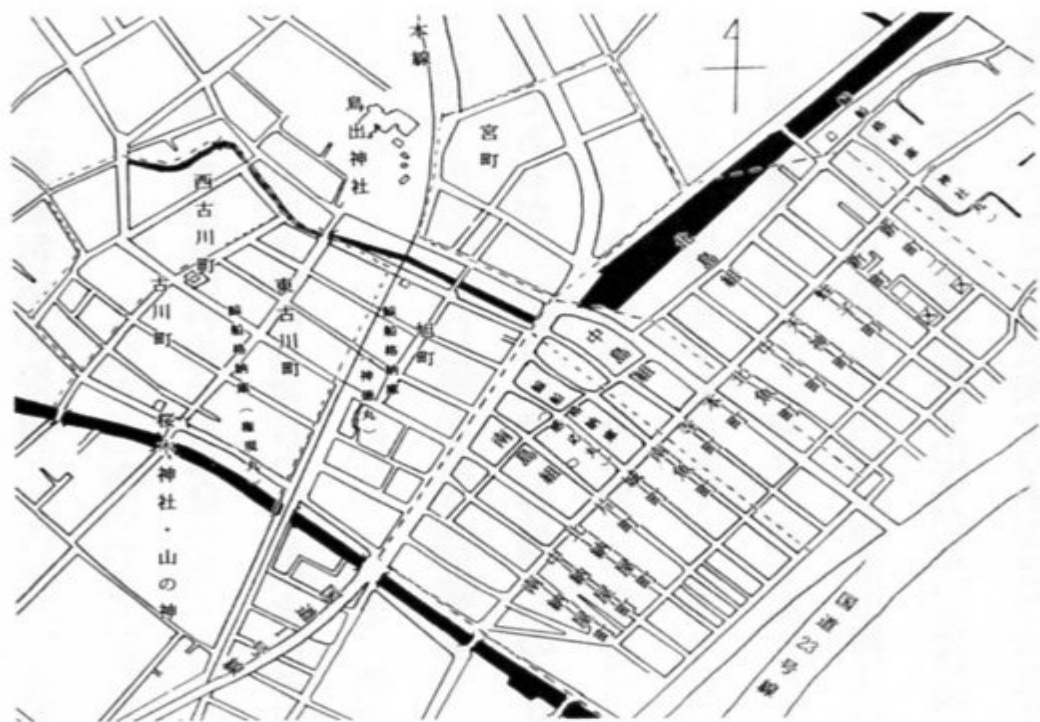
¹⁶ 諏訪神社は鎌倉時代の初め建仁二年(一一〇二年)信州諏訪神社の御分霊を此地に奉遷したものと伝え、四日市開拓以来の氏神である。また、四日市開発の産土神でもあり四日市の氏神として深く信仰され、各商家は四日市が商工都市として発展するに伴い御祭神である「えびす神」に対する信仰が厚く、夷講と唱えて競って諏訪大社を商売繁昌の神として祀った。当神社に対する崇敬は厚く祭礼も四日市まつりとして行われている。

第二章 各鯨船組の組織

一、組織

富田の鯨船は、もともと北島組・中島組・南島組・古川町のそれぞれが独立して存在していた。平成三年に四日市市の無形民俗文化財に指定される際、四組一括で指定ということになり、その必要上、現在の「富田鯨船保存会連合会」という全体をまとめた会を組織した。現在も各組ごとの組織を持ち、各組ごとに会則を定めている。

ハマの各組は、原則として一つの通りの両側の家を単位とする町で構成されている¹。北島組は北から新町二区・新町一区・蛭子町・天神町・中川町・北魚町の計六町で構成されており、中島組は本町・寺町の二町のみである²。南島組は、北島組と同じく六町で南魚町・城町・片町・北納屋町・中納屋町・南納屋町で構成されている。旧東海道に近い古川町は、海道尻(カイド(ウ)ジリ)と呼ばれ、東古川町(富田一丁目一番から十三番・十四番の一部)・西古川町(富田一丁目の十五番から二十番・二十一番の一部)の二町のみで構成されるが、町域は広く人口も少なくはない。



鯨船の組と町の位置

『北勢鯨船行事調査報告書』より転載

		北島組	中島組	南島組	古川町
1. 鯨船行事に関わる人数と役回り	3-2. 男性の役回り	櫓漕ぎ 6 名 羽刺し 3 名 太鼓叩き 3 名 鯨被り 10 名 練り手 20～30 名 唄上げ 数名 梶取り 4 名 サンパライ 12 名 賄い 6 名	櫓漕ぎ 4 名 羽刺し 3 名 腰持ち 2 名 太鼓叩き 3 名 はら 10～14 名 唄上げ 4～6 名 梶取り 4 名 さがり 1 名 サンパライ 10～14 名 鯨被り 6～10 名	櫓漕ぎ（幼～小 2） 羽刺し（小 3～小 6） 太鼓叩き（16～20 代） 鯨被り（20～30 代） サンパライ（50～70 代）	櫓漕ぎ 10 歳未満 3～5 名 羽刺し 10 代前半 3～4 名 太鼓叩き 10 代後半 2～3 名 鯨被り 20 代 はら 30～50 代 唄上げ・サンパライ・交通整理 60 代以上
	4-1. 女性の年齢構成	10 歳未満 数名 10 代 1 名 20 代 数名 30 代 数名 40 代 数名	20 代 1 名 30 代 2 名 40 代 3 名 50 代 1 名 60 代 4 名 70 代以上 10 名	なし	10 歳未満 数名 10 代 4～6 名 20 代 数名 30 代 数名 40 代 数名 50 代 数名 60 代 数名
	4-2. 女性の役回り	櫓漕ぎ 羽刺し 練り手	着付け 化粧 衣装と横幕のメンテナンス 昼食・賄い・休憩などの準備 支援部隊（給水・運搬・子どもたちの補助）	着付け 化粧	櫓漕ぎ 10 歳未満 子鯨 10 代 5～6 名 衣装・給水などの支援 30 代～60 代 15～20 名
	5. 非住民構成員数と呼称	男性 40 名 女性 0 名 名称 北島会（団友も含めた青年団）有志の集まりで基本各町の成人以上。北島出身者以外でも関わりがあれば入会できる。	男性 33 名 女性 7 名 四日市大学生男性 20 名 市民サポーター男性 2 名 名称 特になし	男性 25～35 名 女性 0 名 名称 特になし	男性 25 名 女性 10 名 名称 特になし

		北島組	中島組	南島組	古川町
1. 鯨船行事に関わる人数と役回り	1. 全体の構成員数	男性 100 名 女性 10 名	男性 64 名 女性 27 名 四日市大学生男性 20 名 市民サポーター男性 2 名	男性 100 名 女性 0 名 （女性は参加しない）	男性 90 名 女性 45 名
	2. 住民の構成員数	男性 80 名 女性 10 名 名称 特になし	男性 31 名 女性 20 名 名称 「組内」と呼ぶことがある	男性 50 名 女性 5～10 名 （オナゴシ） 名称 特になし	男性 65 名 女性 35 名 名称 特になし
	3-1. 男性の年齢構成	10 歳未満 6 名 10 代 6 名 20 代 10 名 30 代 15 名 40 代 15 名 50 代 15 名 60 代 20 名 70 代以上 20 名	10 歳未満 2 名 10 代 1 名 20 代 2 名 30 代 2 名 40 代 5 名 50 代 3 名 60 代 4 名 70 代以上 14 名	10 歳未満 4～6 名 10 代 3～6 名 20 代 20 名 30 代 20 名 40 代 20 名 50 代 10 名 60 代 10 名 70 代以上 10 名	10 歳未満 5 名 10 代 15 名 20 代 5 名 30 代 5 名 40 代 10 名 50 代 5 名 60 代 5 名 70 代以上 15 名

二、鳥出神社と鯨船組の関係

かつては青年団が自治会と独立して祭りを企画し、運営・実行していたようであるが、現在はその組にも独立した青年団は存在しておらず、自治会の中に鯨船組が組み込まれて構成されている。その形態は、各自治会には会長・副会長・会計の三役以外に、「祭礼委員」、「青年宿」、「氏子総代」が組織されている。なお、祭礼委員は各町内の鯨船保存会の代表で、氏子総代は各町を代表して鳥出神社の行事運営にかかわり、例祭に参列したり、奉仕活動に加わったりする。一部鯨船に関係を持たない住民もいるようだが、東富田町の町民と鳥出神社との関係は、基本的には自治会に町費を納めている町民は全て鳥出神社の氏子であり、八月十五日の例祭への鯨船行事の奉納者ということになる。

すなわち、各町の自治会の連合体が各組の構成員で、町民の出資や祝儀などを原資に祭りを運営し、各鯨船組を組織して、町練りや氏神である鳥出神社に鯨船行事の奉納を行うのである。

三、組織の構成

四日市市は、令和二年度に鯨船各組に構成員や役割分担をはじめとした基本的な事項や、戦中戦後の様子や伊勢湾台風の影響などのアンケートを行った。以下に、その結果を表にまとめた³⁾。

		北島組	中島組	南島組	古川町
1. 鯨船行事に関わる人数と役回り	10-1.町内在住支援部隊男性の年齢構成	60代 6名	なし	70代以上 1～2名	10代 4名 40代 1名 50代 1名 70代以上 2名
	10-2.支援部隊男性の役回り	賄い 6名		給水車の運搬	給水・運搬など、2日間を西古川町と東古川町で担当を分けて行う。 子ども会の会長・副会長及び保存会の会計が中心で行う。
	11-1.町内在住支援部隊女性の年齢構成	40代 5名	20代 1名 30代 2名 40代 8名 50代 2名 60代 4名 70代以上 7名	40代 2～3名	10歳未満 2名 10代 8名 20代 2名 30代 6名 40代 3名 50代 3名
	11-2 支援部隊女性の役回り	衣装着付け、化粧	衣装着付け、化粧 横幕のメンテナンス 昼食、休憩の準備 給水・運搬、子どもの援助	給水の接待、環境丸（飲料水などの運搬車）の運用、化粧、着付け、救急対応	男性と同じ
	12.支援部隊非住民構成	0名	男性 0名 女性 7名	毎年変動しており不確実	男性 0名 女性 2名
	13.支援部隊非住民男性年齢構成			毎年変動しており不確実	
	14.支援部隊非住民女性年齢構成		30代 1名 40代 3名 50代 1名	毎年変動しており不確実	30代～40代
2. 町内の総世帯数と鯨船行事	1.総世帯数	210 軒	52 軒	231 軒	165 軒
	2.組内の関わる世帯数	全軒	48 軒	全軒	150 軒
	3.関わらない世帯数	0 軒	4 軒 水産加工業	なし	15 軒

		北島組	中島組	南島組	古川町
1. 鯨船行事に関わる人数と役回り	6-1.非住民男性の年齢構成	10代 5名 20代 5名 30代 5名 40代 10名 50代 15名	10代未満 3名 10代 4名 20代 6名 30代 6名 40代 10名 50代 2名 60代以上 2名	10代未満 2～3名 10代 1～2名 40代 10名 50代 5～6名	10代未満 3名 10代 5名 20代 5名 30代 5名 40代 5名 50代 2名
	6-2.非住民男性の役回り	鯨被り 10名 梶取り 4名 練り手 20名	櫓漕ぎ 4名 羽刺し 3名 腰持ち 2名 太鼓叩き 3名 はら 10～14名 唄上げ 4～6名 梶取り 4名 さがり 1名 鯨被り 6～10名 サンバライ 10～14名	10歳未満 櫓漕ぎ 10代 羽刺し・鯨被り・練り手 20代 鯨被り・練り手（稀に太鼓叩き） 30代 鯨被り・練り手 40代 練り手 50代 練り手・サンバライ（少数の者が指導者）	10歳未満 櫓漕ぎ数名 10代、20代 鯨被り 5～6名 30代以上 船回り
	7-1.非住民女性の年齢構成	20代 2名 40代 1名	30代 1名 40代 3名 50代 1名	なし	10代未満 2名 10代 2名 20代 2名 30代 2名 40代 2名
	7-2.非住民女性の役回り	太鼓叩き 1名	着付け、化粧 衣装と横幕のメンテナンス 昼食、休憩の準備 支援部隊（給水・運搬、子どもの援助）	なし	10歳未満 櫓漕ぎ数名 10代 子鯨・羽刺し 20代以上 支援部隊
	8.支援部隊の構成員数	各町会計で賄いを担当 6名	27名	2～3名 （給水・運搬・子どもの援助などは女性中心）	32名くらい
	9.支援部隊（町内居住者数）	男性 6名 女性 0名	男性 0名 女性 20名	男性 1～2名 女性 2～3名	男性 8名 女性 24名

	北島組	中島組	南島組	古川町
	ている。昭和初期までは青年宿も存在していた。	理・保管)は二町自治会祭の企画、運営、実行は青年団（一九七〇年以前まで）が青年宿を拠点に行っていた。練りに関わる非住民構成員は「団友」と呼ばれた。団友は組内の親戚縁者や旧住人(手代、下宿人) など何らかの形で、中組と縁のある者。	一も自治会から選出。以前の組織は、氏子総代と青年宿で仕切っていた(南島組は12名の役員で運営されていた)。昭和の頃は、祭礼委員長は氏子総代だった。市指定になったころは自治会主体になっていたが、祭礼責任者は氏子総代だった。	
8. いつ頃から今の組織となったか	20年ほど前から	戦前戦後も二町で船を所有。自治会が中心で青年団を管掌。23号線が出来て砂浜が無くなり、浜方・納屋方(卸・水産加工業)、網方(漁網製造販売業)、昆布屋(昆布専門加工業)、鯉節屋(鯉節専門加工業)なども少なくなり、中組は基幹産業の減少に伴い、財力・人手も減少した。「中島組」の名称は平成三年に四艘会が組織された頃より使われ始めた。昭和四十五年に十年ぶりに復活する際に祭礼委員、青年宿(青年団長)を自治会(町内会)	国指定重要無形民俗文化財となる前に保存会連合会が正式に引き継いだ。国指定の重要文化財になった時に、国・県・市からの要望などの受け皿的な組織として構成されたようだ。	3年前から執行部を立ち上げた。30代～50代の男性10名ほどと、衣装部として女性3名。月1回集まり、いろいろな準備、役人の選出、練りの進行などの打ち合わせを行っている。執行部内には、祭り当日の進行担当、梶取りのリーダー、鯨被りのリーダーが在籍する。

		北島組	中島組	南島組	古川町
3. 予算	1.予算	90万	繰越金 30万 祝儀、寄付金 60万 町費 30万(50軒)	鯨製作、船本体の飾り付け、準備にかかる費用 祭当日の運行費用 組織の運営費用 保存修理費用	前年度繰越金+町内の寄付金
	2.支出	90万	連合会費 5万 鯨など製作費 10万 ご祈祷料、御供 5万 練習等費10万 修理予備費 17万 火災、傷害保険料13万 祭礼経費 60万	予算と同じ	船と山車蔵の火災保険及び盆祭礼での傷害保険 盆祭礼での食糧費、飲み物代及び役人等への礼金
4. 鯨の組み立て時期		7月初旬～3週間程度(2日/週、作業)	竹の入荷する5月以降、近年は5月中旬に作成する(1～2週間)。仕上げは祭礼の2週間前頃。	7月初旬より、毎日曜日に午前4時間行い3～4日で完成。2体製作。	毎年とは作らない。前回は6月末から約3週間。
5. 山車の組み立て時期		7月末～8月初旬	洗濯:台船を水洗いしてグリスアップし、破損状況を点検(6～7月上旬) 組み立て:7月中旬、草抜きの日曜日	鯨製作と並行して、鯨担当、船担当に分かれて行う。 7月初旬より、毎日曜日に午前4時間行い3～4日で完成。	7月末の日曜日。最終の日曜日を予備日とし、その前の日曜日に4～5時間で組み立てる。
6. 事前練習開始時期		6月中旬から6週間(2日/週)	7月第4週～8月第1週頃の2週間。午後6時～8時、浜のテント前 別に毎月2回、継承のための練習会を日曜日午後1時～3時に通年行っている。	7月中旬から日曜日を除く毎日(19時～21時)6町内浜広場で2週間行う。	8月に入り、土曜日と日曜日を除く毎日。午後7時～山車蔵前で行う。
7. 今の組織になる前の組織		保存会は、自治会と独立していたが、高齢化、人口減少により自治会で構成するようになった	今と同じ二町で構成されていて「中組」と呼ばれていた。 船の所有(管理・修	今の組織は、保存会で運営しているが、主体は自治会。祭当日の飲食、会費の集計、メンバ	ほとんど同じだと聞いている。

	北島組	中島組	南島組	古川町
10. 祭参加者の衣装	半纏、股引は保存会支給 地下足袋は個人負担	ドンザ：共同管理 羽刺し：自前&共同管理品 櫓漕ぎ：自前&共同管理 太鼓叩き：自前で詠える 鯨被り：共同管理品 半纏：作製は組で作製 寺町は自治会長が共同管理 本町は個人で購入管理 学生、応援者用は保存会で共同管理	全ての衣装を保存会で手配。一般の半纏のみ各町管理。	半纏は基本的に個人所有 他の衣装は保存会所有

組	11. 町練りの決まりについて
北島組	・町練りは山車蔵が最初で新町二区より新町一区・蛭子町・天神町・中川町・北魚町の順番。近年は祝儀突きで宮町、大官町へも運行。 ・帰り山は前年の町より一つ南の町から。
中島組	・2町全て回る。1年交代で「本町→寺町→旭町・代官町・他祝儀宅」、または「寺町→本町旭町・代官町・他祝儀宅」 ・浜からその町の提灯台を突く。終わったら次の町の浜からその町の提灯台を突く。 ・祝儀料は原則3万円以上で例年20～30軒が実績。
南島組	・北から、南からと年ごとに交代して進行し、6町内鯨船が通行出来るところは全て回る。 ・各町内の提灯台をその町内全世帯の代表として練る。 ・名所（一本松）、鯨船格納庫、練り受け（祝儀）で練りを行う。
古川町	・1日目は、出船してまず山車蔵を突き、伊勢神宮、山の神を突いてから、その近くから祝儀突きを行う。最後に多度大社（中央通り、町の西端）を突いて終了。 ・2日目は、中央通りから神社側の町内を祝儀突きして神社（本練り）へ入る。その間天候などの障害がなければ町内全てを通り顔見世する。

	北島組	中島組	南島組	古川町
		の組織に組み込み、鯨船行事を自治会全体として支援することとなった。 行事の企画運営については、中島組は各町の自治会長・祭礼委員と町内三役、各委員全員で各々相談して意思決定している。		
9. 各組の特徴	一つ前の屋形柱が最近まで残っていて螺鈿細工が施されていた。それ以外にも、現在も前の装飾部材が残っていて、現在のものとはかなり異なっており、造り替える際には以前のものとは違うものに造り替えていたことが分かる。	船の幅が細身なので、大きく横によく倒れる練りが特徴。 流し唄は北島組に近く「エヘー」で始まり「治まーノお御代やトネー」で終わり、滔々と唄い上げるのが特徴。 太鼓は休拍に「止め」を使い、真上にバチを上げて、ゆったりとした動作で振り下ろす独特な決めポーズが特徴。 五尺板は四艘中で一番立派と言われており、勇壮な龍が力強く彫刻されている。 羽刺しの所作は片足を横に上げて見渡したり、手を左右に広げ扇子をかざしたりと、優雅に立ち振る舞う舞いが特徴である。	南島組が一番良い、面白い、勢いがあるなどの意見をよく頂くので、その気概で行事を行っている。嵐の海に漕ぎ出すというコンセプトで大波の中を進む船を表現している（荒々しく、激しく）。	祝儀突きをしながら、町内全てに顔見世する。 子鯨によって、女性（子ども）も祭りに参加できる。

	二つ目は現東富田会館を建てる時に、当時の倉庫の書き物をほとんど焼却処分してしまったらしい。書き物は伊勢湾台風の水害で酷いものになっていたらしい。(建物は東富田共同販売所と呼ばれ、行政事務所、漁協事務所、加工販売組合事務所と一緒に中組の事務所としても使っていたらしい) 三つ目は、伊勢湾台風の水害で浜に近い家は蔵の中まで被害を受けたため資料が残っていない。 ・鎮火祭の麦藁は、所縁のある茂福・北鰯の農家から、春に収穫した麦わらを貰う。笹竹(真竹)は北鰯の山から切ってきていたが、今は東富田地区自治会がまとめて購入し、各町自治会の役員が町ごとに作っている。菰にお神酒をかけて清め、残りを皆で飲み清めてから神社に向かう。 ・例大祭は、十五日の朝、各町の氏子総代が神社神紋のついた黒い法被を着て、本殿前の玉砂利に並べた床几に座り、大神主の祝詞、神主の祝詞、氏子拝礼、雅楽奉納が執行される（大神主、雅楽隊は伊勢神宮からきているとのこと）。 ・年々子どもの数が少なくなっているため、櫓漕ぎ、羽刺し、太鼓叩きの確保が難しくなっている。
南島組	・1993年頃、江戸川女子大学助教授（現在は退官され、非常勤で江戸川大学に在籍）民俗学の宇野正人氏が調査に来られた。何か記録など残されているかも。 →宇野正人氏と連絡をとったが、知り合いに誘われて見学に行っただけで調査などは行っておらず、記録なども無い。
古川町	年々子どもの数が少なくなっており、櫓漕ぎ・羽刺し（踊り子）・太鼓叩きの確保が難しくなっている。

以上の聞き取りによつて、まず気が付くことは各組ともに少子高齢化による人口減少が課題となつている事が挙げられるであろ
 う。特に十歳未満や十代の子どもたち、すなわち将来の祭りを担つていく年齢層が少ないことである。このことは、富田の鯨船行事に限ったことではなく、ユネスコの無形文化遺産に登録された三十三件の「山・鉾・屋台行事」に対するアンケート調査⁴の「保護団体では、いま何が問題なのか」という質問に対して、78.4%が「後継者の不足」を挙げており、これに相応して「高齢化の進展（67.8%）」が二番目に多い回答であることが挙げられている。

ただし、北島組だけは十歳未満の数が町内住民で確保されている。これは、北島組の町内を見渡すと比較的新しい住宅が見受けられることから、住民が増えていることが挙げられる。また、町内で住居の建て替えを行い、町外へ出ずに居住し続けている住民が出てきていることも要因の一つであると考えられる。この傾向が続くならば将来に向けて望ましいところであるが、それにしても6名では十分とは言えない。

最も深刻なのは中島組である。八月十四日と十五日に行われるこの祭りは、体力も要り、危険も伴う。南島組を除く各組では、近年女性の参加も見られるが、男性中心の祭りであると言える。中島組の構成員の男性は64名、そのうちの町内居住男性は31名と半数を割っている。なお、四日市大学生20人とは、四日市大学の岩崎恭典学長の「祭りとまちづくり」と題する講義を受講

組	12. 戦前は蟹祭りの時に行っていたとの説について
北島組	・現在は不明。 ・以前、秋に3日間行っていたと聞いている。 ・23号線ができる前の海岸〜一本松〜富田浜まで行っていたようだ。
中島組	はっきりしない。
南島組	・昭和の初め頃は、すでにお盆の祭りで、3日間行っていた。蟹祭りのことを知っている人はいない。 ・その頃は、青年団・青年宿、氏子総代が取り仕切っていたようだ。
古川町	分からない。
	13. 戦中の行事は。戦後はいつから復興したか。
北島組	・戦時中は開催していなかったようだ。 ・大正から昭和20年まで休止と聞いている。 ・戦後は昭和21年から復興したようだ。
中島組	・昭和9年と15か16年の写真がある。 ・戦後は昭和24年には再開したようだ。（24年と27年の写真がある） ・昭和34年8月の中日新聞に「昨年は中止した鯨船を景気と呼ぶため豪勢に練り回す事で一致、鯨船四台、石取り車、南町山車、浜元しし舞・・・」とある。
南島組	・戦争激化の頃は休止。 ・出征が決まった人が鯨被りをし、化粧まわしのような立派な前掛けを身に着けて演技をしていたようだ（写真を見せてもらったことがある）。 ・戦後、3年経ったころから復興したようだ。
古川町	不明
	14. 伊勢湾台風の影響と復興について
北島組	・宝物の流出はなかったようだが、装飾の金箔や漆塗りなどが痛んだため5〜6年は休止していたようだ。
中島組	・中島組山車蔵は北島組や南島組に比べて海から遠く、飾りも2階にあり被害は少なかった。 ・修理はしたが、経済力・人口減少で再開に時間がかかり、昭和45年に組織や体制を整えて10年ぶりに復活した。
南島組	・一部の装飾品を避難させてくれた人がいたが、残りは水没した。 ・全てが水に浸かったが山車蔵は倒壊せず、流出はなかった。 ・数名の方によって天日干しされたようだ。 ・伊勢湾台風後、3年ほどで復興。
古川町	・当時の山車蔵が1m位浸水したとのこと。 ・船以外は被害が少なく数年後に再開したと聞いている。
	15. その他
北島組	特になし
中島組	・中島組で鯨船に深くかかわった人がすでに逝去し長老1名の記憶が頼りだった。 ・町内に古い資料が残っていない。理由は三つ。一つは旦那衆が没落して、子孫が現在住んでいないか、住居を建て替えてしまい、古い資料が残っていない。

する学生たちが講義を受けた上で、最後に祭りに参加して単位取得となるというものである⁵⁾。この取り組みによって行事開催が安定することとなったが、大学生であるため、参加するのは単位取得の一年限りであり、祭りの構成員として定着することは望めない。そのため、祭りの継承に繋がるものではないのが残念なところである。大四日市まつりの二日目に行われる「郷土の文化財と伝統芸能」に鳥出神社の鯨船行事から、隔年で一艘の鯨船が参加することとなっている。この日が八月の第一週目の日曜日であるため、中島組ではお盆で帰省する人数も期待できず長らく参加していなかったが、大学生の助けを借りることができるようになってからは参加できるようになった。

このような取り組みは、すでに京都祇園祭で、在京の大学などがそれぞれの最頂の山鉾のボランティア活動を実践していることが知られており、もはやこれら学生ボランティア抜きでは山鉾の巡行を語ることはできない状態となっている。

また、本来鯨船行事は女性の参加が制限されている祭りであったが、近年、南島組を除く各組では、祭り本体への女性の関りがみられるようになってきている。そのことに大きく影響を与えたのは、北島組の乗り手である太鼓叩きに女性が現れたことが大きかったと言われている。その後も、北島組では練り手だけでなく、「太鼓叩き」や「羽刺し」などの乗り手に女性が参加している。中島組でも、北島組に次いで女性の太鼓叩きを起用するようになった他、「櫓漕ぎ」や「はら」で女性が参加している⁶⁾。古川町で

この時、申請にあたって各組の保存会の会則が提出されている。

「北島組神社丸保存会会則」では、会長一名、副会長二名、書記一名、会計一名、会計監査二名、幹事若干名（付帯する名簿には十五名が記載されている）の役員で、平成三年五月二十八日の発効である。

「中島組神徳丸保存会会則」では、会長一名、副会長二名、書記一名、会計一名、会計監査二名、幹事若干名（付帯する名簿には八名が記載されている）で、発効日は平成三年六月二日となっている。

「南島組感應丸保存会会則」では、会長一名、副会長二名、書記一名、会計一名、会計監査二名、幹事若干名（付帯する名簿には四名が記載されている）で、発効日は平成三年五月三十日となっている。

「古川町権現丸保存会会則」では、会長一名、副会長二名、書記一名、会計一名、会計監査二名、幹事若干名（付帯する名簿には十三名が記載されている）で、発効日は平成三年六月九日となっている。

この時組織された各組の保存会が、従来からある各自治会組織の中に組み込まれる形となった現在でも、その形が継承されているものとみられる。四組が一括で指定という形がとられることとなったため、更なる変更が加えられることとなったのであろう。

平成三年六月二十八日発効の「富田鯨船保存会連合会会則」が提出されており、四組から役員は会長一名、副会長三名（会長・

は「子鯨」と「羽刺し」に女性が参加している。

祭り本体への女性の参加が増えてきているのは、少子高齢化による担い手不足や男女共同参画などの社会的要因だけでなく、行事をまち全体で守り、伝統を後世へ伝えていきたいという保存会の思いが背景にある。

そうしてみると、北島組の太鼓叩きに女性が登場したことは、時代の変化に応じた取り組みであるといえるのではないだろうか。

四、各組の組織

北島組・中島組・古川町においては、鯨船組は自治会の会長、副会長、書記、会計、祭礼委員、青年団などの組織の中に組み込まれていて、祭礼委員の中から保存会の会長、副会長が選任され、自治会の役員から保存会の役員も選任されている。鯨船行事においては、各自治会組織は組織運営委員会的な性格の存在で、各保存会は実行委員会的な役割を果たしていると言える。この形態は、かつてはお金を出してくれる旦那衆と、青年団を中心とする若者衆と、青年団を卒業した中老らの組織が、自治会に継承されてきたのであろう。南島組においてはこの限りではないとのことである。

そして、この自治会組織で行われてきた鯨船行事に変更をもたらしたのが、平成三年度の市指定無形民俗文化財への申請である。

副会長を各組から出すこととしている⁷⁾、書記一名、会計一名、会計監査二名（書記から会計監査までも各組から一名ずつ出されている）とし、任期を三年、会長は「中島組、北島組、古川町、南島組の順に持ち回りとする。」とある。現在の富田鯨船保存会連合会の任期は二年となっているが、これは自治会組織の任期に合わせたのであろう。会長・副会長・会計・書記の四役を四つの組から一名ずつ持ち回りで出している。持ち回りの順については、現在でも、中島組↓北島組↓古川町↓南島組の順となっている。鎮火祭や宮参りの順は宮守としての北島組から始まり、中島組↓南島組↓古川町という本来の形となっている⁸⁾。

そして、富田鯨船保存会連合会の名称で、平成三年七月三日付で「四日市市文化財指定申請書」が提出され、平成四年二月二十六日付け「富田の鯨船行事」として四日市市の無形民俗文化財に指定されている。平成十年一月十四日の国の重要無形民俗文化財への指定の際にも「富田鯨船保存会連合会」の名称で指定を受けており、それが現在の四艘会へと継承されている。なお、四艘会は正式名称ではなく、昭和六十一年十月に文化財調査を行うため、四艘で協議会を開いた時から使われ始めた通称名のようなのである。

以下に、各保存会の現在の各組の組織と平成三年度に市指定の申請時の会則、平成十四年度の『報告書』の記載と今回のアンケート結果などを加味してみていきたいと思う。

〔北島組〕

現在の組織は、自治会中心の組織で、保存会の会長の任期も二年であるが、現会長の任期の更新が四艘会で報告されている。このようなこともあり、組員の中にも現会長には任期が無いものと受け止められている向きもある。副会長以下の会員は各自治会長、氏子総代、祭礼委員で自治会役員からなっており、任期は二年。この組織は二十年ほど前から、それまで自治会と独立していた保存会が、少子高齢化と人口減少により自治会で構成されるようになったということであるが、市の指定が平成三年度、国の指定になったのが平成九年でその頃からと地元では理解している。ただし『報告書』では会長一名、副会長一名、書記一名、会計一名、会計監査二名、幹事約十五名としているが、市指定の時に作成された北島組神社丸保存会会則では副会長二名としている。

なお、昭和初期までは青年宿も存在していたということで『報告書』にも「保存会以前の鯨船行事は青年団を中心とした若者衆と、青年団を出た中老らによつて執り行われていた。」としている。また、鯨船行事のためだけに編成される団長一名、副団長一名と十五歳から四十歳代の男性からなる青年部総勢五十名近くが、保存会三十名程度とともに行事に参加することが記されている。

現在、祭礼の本体に関わる男性八十名程度に対し女性が十名程度であり、女性の役回りは櫓漕ぎ・太鼓叩き・練り手となっている。特に乗り手の太鼓叩きに女性が加わったことは大きな特徴と言えるであろう。なお、櫓漕ぎや羽刺しの化粧や着付けは女性の

役回りである。また実働部隊としての「北島会」の存在が特徴的で、行事や準備の段階から積極的に関わっている。

〔中島組〕

中島組については『報告書』において調査に関する項目が欠失している。中島組は人手不足と資金難のため、平成七年から十三年までの七年間行事を完全に休止している。行事の休止期間と調査期間が重なっていたため、『報告書』への記載が欠失したと考えられる。

中島組は、伊勢湾台風（昭和三十四年九月）以前は氏子総代、青年団が中心となり運営されてきたようである。伊勢湾台風以降は、昭和四十四年までの十年間鯨船行事を休止しており、その間に住民数、世帯数が減少したため、自治会組織の中で保存会の役割を果たすこととなったようである。そのため、本町・寺町各々の自治会役員である会長・副会長・書記・会計・祭礼委員・青年宿・氏子総代の内、両町の祭礼委員が互選で保存会の会長・副会長（会計担当）となり、残りの自治会役員が保存会役員も兼ねて運営する形となったとのことである。平成三年の市指定時の富田鯨船保存会連合会会長が中島組保存会の会長でもあったため、申請書に添付した会則に則って保存会を作り直したとのことである。

また、特徴的なのは、名前だけであるが青年宿の名称を残しているところである。最後の青年宿は、東富田会館の道を挟んだ向

かいにあったお好み焼き屋「のりやん」だったという。

また、住民構成員及びその縁者に加えて、四日市大学の学生や市民サポーターが祭りに参加している所に中島組の特徴がある。これは、中島組の本町はもともと商店なども多く、町の出身でなくても、店の使用人などでも昔から行事に参加していたとのこと、非住民の参加にも抵抗が少ないからなのであろう。

〔南島組〕

南島組は保存会で運営しているが、自治会が主となっているという。祭り当日の飲食・会計・メンバーも自治会から出してもらっているとのことである。いつから今の組織かということについては国指定無形民俗文化財になる前とされている。会則については、市指定の段階で平成三年六月二十八日発効の「富田鯨船保存会連合会会則」に先行して、平成三年五月三十日を発効とする「南島組感應丸保存会会則」が作成されており、この段階で指導があつて現在の形となったものと考えられる。『報告書』でも「保存会は平成三年から正式に組織され」とあり、「現在の主な役職には、保存会会長、保存会副会長二名、梵天係（次に鯨突きをする場所を示す係）、進行係（船の進行の指示や行事を進行する係）、腰持ち、鯨被り、唄上などがある」としており、それぞれの係に主任がいる。現在も保存会で運営しているが、主体は自治会となっているとのことである。

以前は自治会とは別に祭りは行われていたと言い、氏子総代と

青年団中心に仕切られていたようで、それに加えて中老層が加わって運営されていたものとみられるが、次第に少子高齢化が進み、他の組と同様に自治会の中に組み込まれていったものとみられる。

〔古川町〕

東古川町と西古川町の二つの自治会で構成されているが、町域は、東はJR関西本線、西は魚周販売店とマルヨススポーツ店の間の別久うどん店のあった通り、南は十四川沿い、北は鳥出神社の前を流れる豊永川（茶の水川）沿いで囲まれた地域である。町は、近鉄富田駅と国道1号線を結ぶ県道8号線（四日市鈴鹿環状線）を挟んだ南北に住宅街が広がっている。

現在の保存会は、会長及び東保存会会計、西保存会会計、会計監査からなり、その他に相談役一名、東古川町自治会長、西古川町自治会長、東古川町氏子総代、西古川町氏子総代が盆祭礼役人として加わった。また、平成二十九年からは執行部を立ち上げて三十代から五十代の男性十名ほどと、衣装部として女性三名が月に一度集まり、役員の選出や練りの進行などを打ち合わせており、この執行部の中から、当日の進行担当や梶取りのリーダー、鯨被りのリーダーなどを選出しているという。

また、組織としても、執行部を除けば以前から組織で行われているとのことである。この組は、市指定の時に便宜的に作られた、「古川町権現丸保存会会則」にあまりとらわれておらず、その意味からすると、以前からの形に近いものがあるのかも知れない。

¹ 南島組の南東部、南納屋町付近は入り込んでいて、この限りではない。

² 中島組の本町と寺町は、かつてはハマの中でも裕福な組であり、寺や商店などもあり、鯨船を維持するのに困らなかったが、現在では急速な少子高齢化の進行により、担い手の最も危ぶまれる組となっている。そのため、市では、ユネスコ無形文化遺産に登録された翌年から「サポーター講座」と称して担い手の養成講座を開催し、行事への理解を進めてきた。その受講者で市民サポーターとして定着している人も数名いるようである。また、祭りの二日目に行われる本練りの日には「見学と体験ツアー」と称して、それぞれの組に分かれて見学できるツアーを開催するとともに、各組ごとに取材して動画と冊子で『「鳥出神社の鯨船行事」継承マニュアル』を平成二十九年度～三十一年（令和元年）度にかけて作成した。

³ 構成員などの数字は、あくまでも令和二年時点のものである。全体に、人数などのついては、毎年変動しているため数字に齟齬が見られるところもある。また、回答が数名や10～20名のものであるため、あまり正確なものとはなっていないが、およよその数の把握には益するものとみられる。

⁴ 清水博之『全国山・鉾・屋台保存連合会平成三十年度アンケート（結果概報）』茨城キリスト教大学文学部文化交流学科

⁵ 四日市大学では、文部科学省の政策であるCOC（地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）―事業を取得して地域との連携を図っていく中で、「鳥出神社の鯨船行事」がユネスコ無形文化遺産に登録されて間もなくの平成二十九年二月三日にCOC事業に関連する第3回地域連携フォーラムを開催し、この中で、「鳥出神社の鯨船行事」の現況を伝えて、力添えを要請した。その結

果、少子高齢化により祭りの開催が困難となっている民俗行事（鳥出神社の鯨船行事含む）の講義を行ってもらえることとなった。学習後、実際に中島組の町練り・本練りに参加する講義内容となっている。

これにより、中島組は八月十四と十五日の祭りには、大学生に加え、お盆に帰省してくる元住民により、辛うじて開催出来るようになった。さらに、八月第一週の日曜日に行われる「大四日市まつり」には長らく参加出来ていなかったが、この学生達の参加によって、平成二十九年度は中島組も含めた四艘が見事勢揃いを果たしたのである。因みにその年は、本祭りにも四艘が出船している。令和元年度にも大四日市まつりに出演している。

⁶ 中島組で乗り手の女性参加が少ない理由として、住民数の少なさが挙げられる。乗り手として参加できる年齢の女性が少なく、練り手での参加が基本となってしまうことが現状のようである。

⁷ 『報告書』第三章・第四節・古川町の二、鎮火祭の中に、「鎮火祭は平成十二年までは、北島組↓中島組↓南島組↓古川町の順に行われるのが慣例であった。（中略）近年はその意識が変化してきていた。そこで平成十三年には、祭礼に先立って各組で抽選を行い、順番を決めた。この抽選で、十三年は古川町↓南島組↓北島組↓中島組の順番で、鎮火祭を行うことが決定した。この順番は本練り宮参りも同じとなる。また、平成十四年度は南島組↓北島組↓中島組↓古川町の順番、十五年には北島組↓中島組↓古川町↓南島組という順番に、鎮火祭、本練り、宮参りを行うことになる。」と記載されており、十六年以降のどこかで修正されたものとみられ、保存会連合会の会長、副会長もそのころ正されたのではないだろうか。

第三章 鯨船の構成要素

一、台船

鯨船山車の概要

鯨船山車はおおよそ、全体の装飾やその他を取り付ける土台となる台船と、台船に取り付ける五尺や馬乗立、銚もたせなどの彫刻部材に大別できる。

台船の船体先端から船体後端までの寸法、こべり（小縁）の外側の最大幅、船体先端の最大高、艫の上端から地面までの高さを一覧にして比較すると下表のようになる。

比較してみると、艫高や長さにおいては中島組が最も大きく、最大幅が狭いことが分かってくる。中島組の台船はよく倒れると言われているが、この長くて狭い構造が倒れやすい要因と

船 名	最大長	最大幅	最大高	艫 高
北島組 神社丸	6, 334mm	1, 593mm	1, 903mm	1, 066mm
中島組 神徳丸	7, 324mm	1, 476mm	1, 476mm	1, 115mm
南島組 感應丸	6, 411mm	1, 531mm	1, 531mm	1, 086mm
古川町 権現丸	6, 205mm	1, 549mm	1, 549mm	1, 098mm

なっているのではないだろうか。

古川町の台船は、艫の船梁だけが固定されていて、それ以外が全て外れるなど、他の組の台船には無い特徴を有しているとともに、全長は最も短くなっている。

台船には、山車巡行に欠かせない車輪が付いている。中島組と古川町の台船では現在五輪で、四輪の駆動輪の前に、通常は浮いていて機能していない車輪が一輪付けられている。これが機能するのは、艫上げの時だけである。

北島組と南島組の台船では、現在四輪の車輪が付いている。これは、平成十五年に静岡県焼津市の近藤和船研究所で、造り替えを行っているため四輪となっている。北島組では、艫上げの際、艫上げ用の枕木を舳先にかまして持ち上げている。南島組は、北島組とは違い艫上げ用の枕木のようなものは用いず、そのまま持ち上げている。

なお、北島組の山車蔵には以前の山車の装飾が残されていて、現在のものと比べると意匠も大きさも全く違うものであったことが知られている。比較的最近まで屋形の柱が残っていたとのこと、その柱は螺鈿の装飾が施されていたという。組では今の前の船の装



艫上げ用枕木

飾としているが、今の船は平成十五年に前の船を持ち帰って同様に作り直したというから、この装飾の船は、さらにそれ以前の船の装飾品であると考えられる。



南島組水押

鯨船山車の組み立て

鯨船山車は、毎年祭りが終わると解体して、それぞれの部材を専用の箱にしまうなどして保存される。

これはどこの山車でも行われており、華美な刺繍の横幕や屋形屋根幕、サガリなどの装飾部材を付けたままにしていると、装飾が退色したり台船に負担がかかったりすることから、部材を守る第一の要因と言える。

もう一つの要因は、150個にも及ぶ部材を組み立てていく、ノウハウの伝承ということが挙げられるであろう。山車の組み立ては、一つ一つの部材の組み付け方とその順番が狂うと組み上げられない場合も多く、主に船首・屋形・船尾の艦立などに分かれて、それぞれのリーダー的役割の人たち二〜三人が主導したり、指示したりして進めていく。一例として、屋形横幕の紐の結び方である「神社結び」（一般的には総角結び・あげ



神社結び

まき結びとも呼ばれている）は、教わらないと出来ないことの一つである。他にも、練りの中で船体を大きく左右に倒す演技を行うために、多くの彫刻部材をウコンと呼ばれる黄色の晒を割いた紐で結び付けていくことも、ノウハウの伝承と言えるだろう。事実、四日市市内や鈴鹿市に伝えられている他の鯨船山車の中では、彫刻部材などを晒で巻いて止めている姿はほとんど見られないのである。わずかに南納屋町の明神丸が、銚もたせの彫刻を黄色の晒で巻いている程度である。

〔北島組〕

七月末から八月初めにかけて鯨船山車の組み立てを行う。山車蔵の前の道路に台船を曳き出し、道路にごさを敷いて装飾品を入れた箱を並べる。蔵の向かいの家の空きスペースにブルーシートを敷いて、その上にパーツごとと並べていく。組み立てる際には、台船上で組み立てる者と、パーツを運ぶ者に分かれて作業を行う。北島組では、ウコンで要所を巻いて補強し固定している。

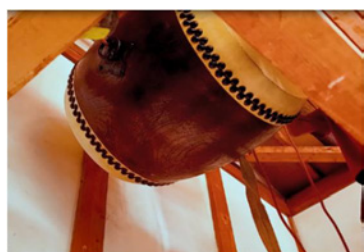


パーツ並べ

〔中島組〕

地元古老の話では、屋形の柱は本来螺鈿の装飾が施されていたが、一本が折れて補われた時に、全て黒漆塗りにしたとのこと。実際に現在の柱を見ると、黒漆の下に螺鈿が確認できる。最近まで残されていたという北島組の屋形の柱に共通するところがある。

組み立て当日は、まず山車蔵に吊るした太鼓を下ろして台船に設置し、太鼓を叩きながら台船を浜まで運ぶ。装飾品は、収納されている箱ごと車で運び、浜に敷いたブルーシート上に分類してパーツを並べ、細かいところは前年の写真などを参考にしながら組み立てていく。主に、舳先の水押や馬乗立、五尺、銚もたせなどを組み立てるグループ、屋形回りのグループ、艦立や扁額などのグループ、装飾こべりや横幕などの外面のグループにそれぞれ分かれて作業を行う。組み上がると、山車蔵まで太鼓を叩きながら移動して蔵に収納する。



吊り下げられた太鼓



装飾品箱の運び出し



パーツ並べ



グリスアップ



パーツ並べ



横幕おさえ取り付け

〔南島組〕

山車の組み立ては、鯨の製作の最終日に、別のグループが並行して行う。鯨の製作には三〜四日かかるが、山車はおよそ半日で組み上げられる。まず、台船を山車蔵前に曳き出して車輪のグリスアップをする。次に、山車蔵横の駐車場にブルーシートを敷き、装飾品を箱から出して分類しながら並べていく。小さな補修などは、この段階で行う。横幕の取り付けは、横幕の小さい穴に通っている紐を船体の釘へ引っ掛け、紐の両端を引っ張り余分な紐を巻き取り、上端の横幕おさえをボルトで留め、寄り掛かり装飾板もボルトで留めていく。そして、波幕を横幕の下に取り付け穴に入れ、横幕おさえで横幕とともにボルトで留めていく。同時に舳先の五尺や馬乗立などの船首部分を組み立て、銚もたせや文台を取り付け、銚をセットする。水押を組み付け、水押御紋を被せるとサガリを掛け、黄色の晒で巻き付けて完成する。

船尾の艦立は、まず、両側の飾り金具で固められた親柱を船体

のほぞ穴に立て、その外側に牡丹の飾り彫刻を立てて、船体の差し込み穴に落とし込む。柱の上に横材を掛け、船名の扁額を掲げ、両外側に飾り金具で巻いた子柱をほぞ穴に立て、それぞれを遊離しないように黄色の晒で巻いて出来上がる。

〔古川町〕

台船を山車蔵前の道路に曳き出し、山車蔵横の駐車場にブルーシートを敷き、分類しながらパーツを並べていく。部材の一部ないしは全体を黄色の晒で巻いて収納しているので、それを取り外しながら作業を進めていく。

水押御紋とサガリを取り付けるグループと、台船について横幕を付けたり、車輪に機械油（他の三組はグリスを用いるが、古川町は機械油をポンプ式で注入する工夫がされている）を指し、艫立を組むグループ及び屋形を組んでいくグループに分かれて作業を行う。



晒の取り外し



サンパライ製作



波幕

古川町のサンパライは、赤・オレンジ・ピンク・黄・水色の五色の紙で製作される。サンパライが紙で製作されるのは、古川町だけの特徴である。

また、ハマの三組と古川町では、波幕の波の色が違っていることも特徴の一つである。

祈祷

ハマの三組は、鯨船山車を組み上げ終わると、それぞれの山車蔵に鳥出神社の宮司を招いて行事の無事を願って祈祷を行う。

北島組は、山車を艫立の辺りまで山車蔵前の道に曳き出し、舳先の横に二頭の鯨を並べて置き、その前に据えられた縁台に供物が供えられる。

中島組は、山車蔵前の本町通の交通量が多いため、山車は山車蔵に入れたまま、鯨も山車の横に置き、供物も蔵の中に縁台を据えて供物を並べ、祈祷を行う。

南島組は、山車蔵の前に山車を曳き出して、二頭の鯨を山車の左右に並べ、それらの前に縁台を置き供物を供える。

宮司の執り行う祈祷の式次第はいずれもおおよそ同様のもので、まず、大祓詞を奏上し、終わると祓串で鯨船山車を正面から修祓し、ハリボテの鯨を清め、船尾に回り込んで山車や祭りに使う道具などを修祓する。終わると、組員全員に向かって修祓を行い、組員は頭を下げてこれを受ける。

次に禊祓いの天津祝詞を奏上し、組ごとの名前を入れた祓詞を

二、装飾

鯨船山車は絢爛豪華な金彩の彫刻や刺繍などが施された屋根を持ち、緋羅紗に金糸などの見事な刺繍で彩られる横幕、漆地に彫刻や飾り金具の配された水押、それから垂れる金糸で構成されたサガリなど、全て豪華な装飾がちりばめられる。

この装飾の項では、各組の特色が明確に表れている物についてのみ詳述する。

銚

銚もたせには、一の銚・二の銚・とどめの銚の三本の銚が乗っており、中島組の銚は、その他の組にはない特徴を有している。手前側が一の銚、奥側が二の銚、真ん中がとどめの銚となっており、二の銚は一の銚に比べて少々長い。形からすると、一の銚は最初に投げる「早銚」に似て、二の銚は「手形銚」か、あるいは



北島組 祈祷



中島組 祈祷



南島組 祈祷



中島組 銚



古川町 銚

は「萬銚」に似ている。とどめの銚はまさに動きの鈍った鯨にとどめを刺すために打ち込む「剣」に似た形をしていて、これは各組ともに共通する。他の組では一の銚と二の銚の形状の違いが忘れ去られ、一の銚も二の銚も「手形銚」の様相を呈している。

横幕

船体装飾の大きな面積を占める横幕は、各組で意匠が異なった仕上がりとなっている。

北島組は、緋羅紗に鯨の刺繍が施されており、船体向かって右側に阿形、左側に卍形の鯨である。また、鯨の周りには、波間を飛び交う千鳥の刺繍が施され、朝の豊かな海を表現している。

中島組は、緋羅紗に金糸で左右に阿吽の龍と波の刺繍が施され、昼の海を渡る龍が表現されている。

南島組は、緋羅紗に金糸で龍と波が刺繍されている。中島組と同じ龍の刺繍だが、南島組は、荒ぶる午後の海を表現しているため、ヤクの毛を植えた龍のたてがみが振り乱れて描かれていることが特徴である。

古川町は、緋羅紗に金糸で神仙の住まう蓬莱島より飛来する千鳥と波の刺繍が施されており、穏やかな海を表現している。江戸時代から繁栄した商家や作り酒屋などに好まれた意匠となっている。

このように、組ごとに個性のある刺繍が緋羅紗に施されており、山車を見事に飾っている。

しかし、こうした美しい装飾も経年による劣化が起きることは避けられない。

富田の鯨船行事は、山車を前後や左右に大きく揺らして船が揺れる様子を表したり、急激に回転させたりと激しい所作を行うことが特徴である。そのため、一度練りを行うと山車が傷んでしまう。軽微なものであれば保存会で修復するが、劣化や傷みが大きくなると、専門委員の意見を聞き、復元新調事業を行っていく必要がある。

横幕は演技の内容を考慮し、五十年程度を目途に復元新調を行うことが目安とされており、現在の意匠を踏襲しつつ、強度を高める方法の検討を行うことが基本方針として、鳥出神社鯨船行事山車修理指導委員会にて定められている！。



北島組 神社丸 横幕



中島組 神徳丸 横幕



南島組 感應丸 横幕



古川町 権現丸 横幕

屋形屋根幕

横幕同様に、屋形屋根幕にも絢爛豪華な金の装飾や緋羅紗に刺繍などが施されており、その意匠も組ごとに大きく異なっている。

北島組は、金地板葺きで、屋根の上に、宝珠を挟んで対峙する龍とその外側に一對の鯨が配されている。また、屋根の斜面に沿って両側面に龍の彫刻が施されている。

中島組は、緋羅紗に阿吽の飛龍が波と雲気の間に描かれ、太陽と海との間を飛ぶ様が金糸の刺繍で施されている。また、屋根の大棟には唐獅子牡丹とそれを挟む一對の鯨、四方には阿吽の龍の彫刻が配されている。

南島組は、金糸苦葺きと呼ばれる技法で製作されており、他の三組とは大きく異なっている。苦とは、スゲやカヤなどを編んだむしろのことで、和船や家屋を覆って雨露をしのぐためのものである。この苦は、以前は手撚りで一つずつ製作していたようであるが、その技法は現在では失われている。経



北島組 屋形屋根幕



中島組 屋形屋根幕

年による劣化が激しくなったこともあり、令和四・五年度に復元新調事業を行っている。特に、苦の斜辺部の加工は現在の技法では再現不可能と言われていた。しかし、鯨船山車修理指導委員会にて、専門委員や文化庁と再現方法について検討した結果、現品に近い形で復元新調することができた。この金糸苦葺きは、鯨船の激しい動きに合わせて、フリンジの部分が動くことが大きな魅力である。

古川町は、北島組と同様に、金地板葺きになっており、そこに唐獅子牡丹を配している。大棟には、五匹の唐獅子と両端に一對の鯨、その下段に一對の龍が配されていることが特徴である。



南島組 屋形屋根幕



古川町 屋形屋根幕

艦立・扁額

山車の船尾には、艦立と呼ばれる門型の装飾があり、船名を記した扁額を掲げる。

北島組は、両の柱に龍を、桁の上部にはむら雲に日輪と月輪を金銀で表し、鳥出神社の神紋である三つ巴に上り藤を配している。そして、その中央に「神社丸」の扁額を掲げている。

中島組は、両の柱に鯉の滝昇りが彫刻され、その内側には左旋と右旋の龍の彫刻が施されている。また、桁には鳥出神社の神紋である三つ巴に上り藤を配し、中央に「神徳丸」の扁額を掲げている。扁額の上部には、波と雲気の間に昇り来る日輪と月輪の彫刻が施され、その両端には唐草文様を線刻した飾り金具がはめられている。

南島組は、両の柱に三つ巴の神紋と上り藤、縦に唐草紋の飾り金具をはめ、その両側を唐獅子牡丹の彫刻で飾っている。桁には、黒漆塗りに三つ巴の神紋と両端に毛彫りの唐草紋の飾り金具をはめ、中央に「感應丸」の扁額を掲げている。

古川町は、両の柱に波に水飛沫をあげて跳ね飛ぶ鯛の彫刻を施し、それを黒漆塗に唐草紋の金具をはめた支柱でそれぞれ両側から挟みこむ。上部の桁は、黒漆塗りとして毛彫りと透かし彫りの唐草紋の金具をはめ、中央に「権現丸」の扁額を掲げて、両側から金鯨の彫刻で挟みこんでいる。



北島組 艦立・扁額



中島組 艦立・扁額



南島組 艦立・扁額



古川町 艦立・扁額

サガリ

鯨船の形態で特徴的なのは、水押部分が実際の船よりも大型化している所である。そこに精緻な龍の彫刻などが施され、先端に2mを超える金糸製のサガリが下げられている。サガリも、横幕や屋形同様に、各組による違いを見ることが出来る。

一つ目は、結び方である。北島組と古川町は「二重堅結び」、中島組は「こま結び」にして祝福吉兆を表し、南島組は「つゆ結び」²と、結び方が各組異なっている。

二つ目は、サガリを製作する時の技法である。中島組・南島組・古川町は「金糸巻き上げ」という技法で製作されているが、北島組だけが「金糸綴じ付け」という特殊な技法にて製作されている。金糸綴じ付けという技法は、金糸が基布に固定されているため、曲げや結びの際、金糸が擦れて破損する可能性があるため、掛け網が施されている。この掛け網の仕様や素材を見ると、当初の製作物でない可能性が考えられる。サガリの網の結び位置が変更されている形跡からみても、金糸の破損を補強するために行われた後補であると考えることが妥当であろう³。

他にも、鉾立や五尺板などにも豪華な装飾が施されており、聴衆を惹きつける。鯨船行事は、船体を左右に揺らす所作に注目されがちだが、こうした装飾の美しさもまた、鯨船行事には欠かせないものとなっている。

三、鯨製作

鯨船行事の準備は、ハリボテの鯨の製作から始められる。鯨は、組によって製作の方針が違っており、よく壊れるため修理が必要となる組や、全く壊れずに数年に一度修理する組、壊れるわけでもないが毎年丹念に作り直す組などがある。

鯨は各組一頭が基本であるが、北島組と古川町は例外として二頭の鯨を所有している。北島組は、平成二十九年度の大四日市まつりに出演した際に、二頭分の鯨の製作を行った。それ以来二頭分の材を所有するようになった。古川町では、子どもが参加するための子鯨を所有している⁴。

鯨は、昔は青年団で製作したものというが、現在では昔でいう中老以上が中心となっている。材料となる竹は、昔は近くで入手したということだが、現在では四日市の竹屋から、幅3〜4cm程度に割いたものを購入しているという。



鯨製作の様子

鯨の体幹部は、主に木材や竹を組み合わせて作られる。土台は、体幹部に塩ビ管などを炙って曲げたものを用いる。部材を繋ぎとめるために多くは結束バンドを用い、ウコンを巻いていく。尾鰭には車のタイヤを縦半分にしたものや、船を岸壁に繋ぎ



北島組



中島組



南島組



古川町

とめるための頑丈な舳い綱などが用いられ、それを番線などで本体にしつかりと括り付けたうえで、上から黒いビニールテープでぐるぐる巻きにするなどして形成する。ハリボテの鯨は、尾鰭に重量をかけているので、重量が100kgほどあると言われている。そのため鯨被りは若くて屈強な者が選ばれることが多い。

また、現在では見られないが、潮吹き穴から水を噴き上げるような工夫のなされた鯨も作られたことがあったようである。

〔北島組〕

七月の初めの土曜日と日曜日の午前中、三週間ほどかけて製作する。現在では、平成二十九年度に、大四日市まつり用と、鳥出神社における本練り用にと、常に二頭分の材料が用意されている。

富田では、北島組が最も鯨に工夫を凝らす組とされていて、以前には軽量化をはかるためにオールアルミの鯨が登場したこともある、ということを他の組から伝聞したことがあるが、今に残されてはいない。現在では、他の組と同様な部分も多く、竹と木材、塩ビ管などを体幹部に用いて作られている。

頭の下部の曲げた竹材の終わりに近い途中部分から、左右に一本ずつ塩ビ管を伸ばし、尾鰭の部分まで絞っていくため、長さを変えた横材三本に結び付ける。その先に大小の塩ビ管やクツションを幾重にも巻いて、その上から車のタイヤを縦に半切りにして被せて形を整えて作り、上から黒のビニールテープでぐるぐる巻きにして尾鰭を作る。頭部と下顎は黒布を張り、上下を縫い合わ

せる。そして、黒布を張った背鰭・胸鰭と波幕を付けて完成となる。



尾鰭製作



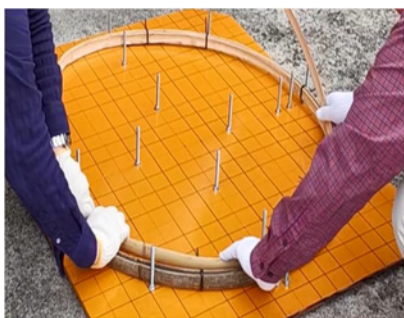
波幕縫い付け

〔中島組〕

毎年竹の入荷する五月以降に製作を始めるという。基本的には中島組は、鯨を壊さないため網だけ被せる時も多いという。この組の鯨は、最も古くからの作り方に近く、ほとんど竹と木から組み立てられている。

鯨の背となる竹を受ける体幹の輪は、塩ビ管などを用いず竹で作っている。その竹を丸める時には、板にボルトを何本も通して固定した鯨の胴体部の製作用の型を使用する。それにより、使いたい位置に合わせた大きさの竹に丸めることができる。

次に、縦横の竹材や木材の部分の露出部に黄色の晒を巻いていく。特に、肩など体にあたる部分は手厚く巻いていく。



胴体部 製作用型



尾鰭製作

尾鰭はこれらとは別に、船を繋ぎとめるための舳い綱や番線で結び付け、その上から黒のビニールテープを巻きつける。背鰭は、竹を成型し網で作り、胸鰭はシユロの繊維を束ねたものを取り付ける。最後に被せた網に黒のスプレーをかけて着色し、目や潮吹き穴、胴体の下には波幕をそれぞれ縫い付ける。

〔南島組〕

七月初旬の毎日曜日の午前中三〜四日かけて製作する。この組は、練りが最も荒く激しく鯨が壊れやすいため、始めから二頭の鯨が作られている。

口の部分は竹を曲げて作り、太めのロープを縫い付け、ソテツ

四、乗り手と練り手

鯨船行事での役回りで、鯨船山車に乗り込んで演技に関わる者を「乗り手」、それ以外を「練り手」と言う。練り手には山車に乗り込まずに山車に取り付いて練る者や、その周囲で関わる者と鯨被りに別れ、それぞれに役回りがある。

《乗り手》

羽刺し（ハタシ、ハダシ、ハザシとも、また「銚打ち」と呼ぶこともあるようである。）

この行事の主役とも言える踊り子である。本来はハザシなのであるが、古式捕鯨の行われていた和歌山県太地町でもハダシと呼んでいることから古式捕鯨に関わってはハダシが本当なのであろう。富田では「ハダシ」が「裸足」に通じることから、それを嫌って

「ハタシ」と呼ぶようになったのではないか、という説がある。

組によって多少異なるが、薄い桃色や水色、黄色などの無地の襦袢を重ねて着て、その上に緋色に黒襟で胸から袖先まで複数の金糸の飾り房を付けた（両肩や背にも）上着を着し、さらにドンザと呼ばれる漁



羽刺し ドンザ着用

〔古川町〕

特色として、親鯨に加えて子鯨を製作することが挙げられる。これは平成二十七年頃から行われるようになったもので、鯨船行事は小学生の参加できる割合が少ないため、子ども向けに子鯨を作成することがきっかけとなっている。つまり、古川町に子鯨があるのは「子どもの参加を可能にするため」ということが主たる目的である。



本体骨組み製作



頭部製作

を結びつける。体幹部は塩ビ管を半円形に曲げて作った胴体部に割いた竹を渡して成形し、本体の木枠に黄色の晒で結びつける。その際、背の中心部分の竹を一本だけ置き、中央の位置を決め、その左右に竹を順に渡して作業を進めていく。胴体の色は、緑の蚊帳と黒の網を重ねることで、深みのある色を表現している。途中、鯨被りがバランスを見ながら進めていき、最後に左右に波幕を縫い付けて完成する。

師の防寒具に由来する黒地に刺繍を施した豪華な衣装を身に纏う。

南島組では桃色の帯を後ろで結び、その上からドンザを着して黄色の帯を蝶々結びとし、次に水色の帯を同じく蝶々結びとして左右に分けて前に垂らす。手甲、脚絆を着け、足袋に雪駄を履く。額に薄い水色の鉢巻きを額の真ん中で結び両端をこめかみの辺りで折って、内側に挟んで下から上に持ち上げその折り目を出す。ドンザの下に着る着物や帯の順番については、多くの組は決まりがないようであるが、南島組だけは、化粧をする美容室の奥の部屋で着付けをし、その部屋の柱に着付ける着物の色や帯の順番が書かれており、それに従って着付けがなされている。

羽刺しを演じるのは小学校中々高学年で、「ヤサネー、ヨシタ、ヨシタ、ヨシタ」の掛け声に合わせて所作を繰り返す、最後には鉾を打ち込み鯨を仕留める、いわばこの行事の花形である。今では衣装はどこの組でも保存会が管理するが、戦前までは個人持ちで、羽刺しを出すような家は裕福な家であることの証明でもあった。激しく揺れる船上で踊り続けるという演技の特性から、この役割を担うことは、一人前の漁師になるための通過儀礼としての位置づけでもあったと考えられる。

所作自体はさほど複雑ではないが、手のあげ方、扇の扱い、手の振り方、ひじの張り方、指先まで意識を向けるこ

とが求められる。そのため、行事が近づくくと、唄いや太鼓に合わせて毎晩のように練習が行われる。

町練りの演技になると、上から羽織っていたドンザをもろ肌脱ぎにして、腰にはだけて演技を行う。各組の所作の顕著な違いとしては、鯨を見つけた直後の所作が指摘される。流し唄から「上げるぞ」などの掛け声で役唄に替わり「背美（せみ）。は来る来る」の歌詞の時に、片手で扇を広げて目線にかざすところから鯨突きの所作が始まる。

北島組と中島組では、扇を目線にかざして鯨を見る所作の時に、腰持ちが羽刺しの左足を持ち上げ、次は反対に右足を持ち上げる所作を行う。その後「ヤサネー」の掛け声で体を右から左に捻るとともに、右手を振って両手を開き、両手を肩の位置で上下させる。腰持ちの肩を借りて上体を大きく後ろに反り返り「ヨシタ、ヨシタ、ヨシタ」の掛け声に合わせて両手で持った扇子（途中、扇を置いて両掌）を前へ煽りながら、立ち上がってくる所作を繰り返す。

南島組では同じく「背美は来る来る」の時に扇子を目線に掲げ腰持ちが、羽刺しの腰を持って右の舷側に飛ばし次に左の舷側へ飛ばして「ヤサネー、ヨシタ、ヨシタ、



むかえほくろを入れる



北島組 ドンザ



中島組 ドンザ



南島組 ドンザ



古川町 ドンザ

ヨシタ」の掛け声で、他の組と同様の所作を行う。古川町では逆に左の舷側に飛ばし、次に右の舷側に飛ばす南島組とは左右が逆に行われる。

なお、乗り手の中でも羽刺しと櫓漕ぎは化粧を施す。羽刺しは白塗りに頬と唇に紅を差し、目尻に一本ずつ紅を引き、眉の上、額に黒の星（〓むかえほくろ）を筆の元の円形を利用するなどして二つ入れる。

櫓漕ぎ（ロコギ）・・・羽刺しの後ろ、屋形の前に座って、舷側の櫓に掴まって耐える役で、羽刺しが鉾を打って鯨を仕留めると、控えの羽刺したちとともに立ち上がって両手を横に広げて祝いのポーズをとる。三歳から小学校低学年までが務めるが、ただ掴まっている役と言っても、真夏の炎天下、山車は走ったり止まったり、逆方向に走って後退したり、左右に大きく傾けられたり、場合によってはぐるぐる回されたりと、掴まっているだけとはいえ幼い子にとっては大変な行事である。泣き出す子も出てくるので、休憩時などには女性を中心とした支援部隊が櫓漕ぎを落ち着かせたり、皆の水分補給をしたりと活躍する。特に、東富田はもともと漁師町で成人になれば船に乗ることから、ハマの三組では、一つの通過儀礼と言えるのかも知れない。

衣装は、羽刺しの衣装からドンザをなくした姿で、手甲、脚絆に、足袋に雪駄を履き、頭には花笠を被る。南島組の

場合には、緋色の上着に帯は桃色、水色の順で蝶結びとして、結び目を左右にずらして前に垂らす。さらに黄色の帯で背中の着物の中を通して肩の前に回し、それをさらに背中へと回して着物を絡めて蝶結びとして背中に垂らす。

櫓漕ぎの化粧は、羽刺しと同じく白塗りに頬と唇に紅を差し、目尻に一本ずつ紅を引き、眉の上の額に紅の星を二つ入れるが、古川町だけは羽刺しと同じ黒の星を入れる。

なお、南島組を除く各組では、近年は、櫓漕ぎに十歳未満の女兒の参加がみられる。



櫓漕ぎの衣装

腰持ち（胴持ち）・足持ち（コシモチ（ドウモチ）・アシモチ）・・・羽刺しの演技中は、鯨船山車が左右に大きく揺れるため、腰持ちが船に腰掛けながら羽刺しの腰を抱え、足持ちが船内に潜り羽刺しの足を支える。山車を左右に揺さぶりながら行う富田の鯨船では、安全に行事を行う上でも大事な役目と言えよう。

腰持ちは、文台や、文台を取り付けた船梁などに腰掛けて羽刺しを支える。



羽刺しを支える腰持ち・足持ち

各組の唄いは歌詞が一緒でも節回しが微妙に違っているため、当然叩き方もそれに合わせて微妙に異なってくる。そのため、行事が近づく、毎晩のように練習が行われる。

各組の相違点・共通点としては、ハマの三組の太鼓叩きは、右手で太鼓を叩く所作だけで実際は叩かない「止め撥」を行う。同時に左手を右肩に振り上げる所作や、撥の根本で太鼓の周りの鉾のあたりを叩く所作などがあるが、古川町ではそれらが見られない。また、道

中伊勢音頭の際に、撥で太鼓の胴を叩く縁打ちでリズムを取るのには各組に共通する。



太鼓叩き

《練り手》

梵天持ち（ボンテンモチ）・・・祝儀突きや役突きなどで町内を練る時、各組の梵天が目印となる。突く家の前や提灯台などに梵天を運び立てる役をいう。本練りでは、最初に大鳥居に梵天を立てて鳥居を突き、境内に入ると二の鳥居に立てて本殿と蛭子社を突く。

梵天は、北島組と南島組では木製を用い、中島組と古川町では布製を用いている。前者は、漁に用いる浮標としてのブイに由来するのではないかとされている。

るが、北島組を除く組の台船は腰持ちの右足にあたる部分の床材が切り取られており、一つ下の材に足を入れて踏ん張れるようにしてある。切り込みの無い北島組では主に船梁に腰掛け、右側の舷側に体を持たせかけて羽刺しを支えている。足持ちは船床に突っ伏して足を押さえている。唄が流し唄から役唄に替わる合図は、腰持ちから出される組も多いようである。

太鼓叩き（タイコタキ）・・・衣装に特定の決まりはないが、鯨背な着流し姿で屋形の中に据えられた長胴太鼓を叩く。行事の全ては太鼓のリズムに合わせて進行する。鯨を見つめるまでの間は流し唄に合わせて優雅に叩き、鯨を見つけると唄が役唄となり鯨を追いかける場面へと切り替わる。そして、鯨の反撃を受けて急激に後退させられる場面では、叩き方が速くなる。

体勢を整え再度鯨を追うと、太鼓のリズムは徐々に速くなり、臨場感を盛り上げる。鯨の頭が持ち上がると太鼓はドラムロールのように連打する。最後に気持ち一拍ためてドンと叩くと、羽刺しは呼吸を合わせて鉾を放つ。その緊迫感を表現し、クライマックスでの盛り上がりを演出するのも太鼓叩きの役目である。このように、演技の場面により叩き方が変わるため、太鼓叩きは、行事において重要な役割を担っていることがわかるであろう。



北島組 梵天



南島組 梵天



中島組 梵天



古川町 梵天

さがり（さがり持ち）・・・各組の船は舳先に水押を持ち、水押の先には鳥出神社の神紋である三つ巴の刺繍を施した水押御紋が被され、そこからは金糸で作られた豪華なサガリが垂れる。このサガリは、演技の最中に放っておくと山車を左右に倒した時や、山車を回したり、艀上げを行う時などに地面に叩き付けられたり、船体にぶつかったりするなどして傷んでしまう。そのため、サガリの房の上に綱を付けて、サガリが傷まないように引つ張っている必要がある。それを行う役を「さがり」とか、「さがり持ち」と呼ぶ。



さがり持ち

はら・・・山車本体の動きは主に「はら」が行っている。山車の両側（はら）に付いて、かつぎ棒（鉄製の手摺り）を持つて前後に移動させたり、船尾にいる梶取りが向ける方向に合わせて山車を振ったり、左右に倒したりするなどの演技を行う役である。特に左右に倒す時は危険が伴うので、倒れて来る方にいる者はそれまで順手でかつぎ棒を持っていたものを逆手に持ち替えるなどして、怪我をしないように演技している。

かじ（梶取り）・・・船尾に付いて、船の進行方向を決める役回りで、四名ほどで行う。実際には、「はら」などとも協力して方向転換を行っている。

唄上げ（唄い衆）・・・山車の周囲に付いて、流し唄や役唄を唄いながら行事を進行する。唄の歌詞は非常に多く、歌詞を印刷した扇子や団扇などを持ち歩く組もある。流し唄は、唄う歌詞に順番は無く、タイミング良く唄い出した者の歌詞を皆で唄う。それぞれに得意な唄があるようである。比較的新しい歌詞もあれば、古くから唄い継がれた歌詞や、忘れ去られた歌詞もあるようである。

また、役唄の歌詞が羽刺しの演技と連動していることや、祝い唄の中に艀上げの上げ下ろしを行うタイミングの歌詞があることから、唄上げが行事において重要な役割を担っていることがわかるであろう。

サンパライ（ハタキの意味）・・・いろいろな色の布（古川町は色紙）を細長く切つて竹の棒の先に結び付けたもの（これ自体をサンパライともいう）を持って、行事の警護や、山車が家々に当たらないように気を配ったり、鯨が観客の中に飛び込んだりしないように、鯨に入っていない鯨被りとともに体を張つて制する役である。すでに「はら」などの役を卒業した年長の経験豊かな者が担当する。

鯨被り（クジラカブリ）・・・行事の中では敵役的存在であるが、この行事の一方の主役とも言える。鳥出神社境内で行われる本練りでは、鯨の元気が無いと観客から発破が掛けられたりもする。

鯨は、町練りでは基本的に一回で仕留められるが、本練りでは突かれる際に逃げ出して何度もやり直される。しかし、演技の時間が決められているため、それ以上の延長は無い。

例外として、古川町の町練りの最後の多度大社を突く際には、他の組とは違い、町練りであっても何度でも逃げ出して突かれなければならないようにする。鯨被りと鯨船山車を操る側との体力勝負となる。

演技中、鯨と山車の向きは逆の動きになる。例えば、山車が右に倒している場合、鯨は左に走る。本練りでは、観客が中に入らないように時にロープが張られて仕切られているが、鯨が観客席に飛び込もうとして、観客を驚かせたりする。それを、鯨に入っていない鯨被りの交代要員やサンパライに抑えられたりする。

鯨は反撃したり逃げ出したりするが、最後には、鯨が海面に顔を出し、それをサンパライらが棒で抑える。



鯨を抑えるサンパライ

そして、太鼓が連打され、一呼吸をあけ、羽刺しが銛を打つのに合わせて太鼓を「ドン」と打ち、羽刺しが鯨を仕留める。打たれた鯨は、頭を右↓左↓中と振つて（南島組だけは、左↓右↓中の順）、頭を高く放り上げ、それを地面に着く直前で拾い上げ上下に揺さぶりながら走る。この所作を古川町では「おうてをうつ」と呼んでいる。ここまですつ練りを奉納する。古川町は本殿のみ一本を奉納する。

ハマの三組の鯨被りは鯨の前後に入るが、タカの古川町は左右並んで入つて演技を行う。それぞれの鯨の人の入る部分の最大幅は、約北島900mm・中島790mm・南島760mm・古川町1020mmとなつていて、やはり多少古川町が幅広に作られており、横に並んで入つて演技がしやすいようになっている。また、古川町には子どもが練りに参加するための子鯨もある。



古川町 鯨被り



古川町 子鯨

その他

支援部隊・・・直接祭りに加わるわけではないが、女性を中心として飲食や子どもの対応、または救急対応をする部隊である。真夏の炎天下に行われる祭りであるため、給水などで祭りを支援するのは重要な役回りであると言える。（古川町では、二日間を東古川町と西古川町が担当を分けて行っている）。飲食物などの荷物を軽トラックやリヤカーなどに載せて運んでいる。南島組ではこのリヤカーを「環境丸」と称している。

その他にも、羽刺しや櫓漕ぎの化粧や着付けも女性の役回りである。北島組と中島組は組内の美容室がなくなったため東富田会館で、南島組では町内の美容室を用いて化粧と着付けを行っている。古川町の場合、化粧は町内の理容室で行われ、着付けは古川町集会所で行っている。



着付け



支援部隊（荷物の運搬）

五、唄いと歌詞

唄い（唄上げ・唄い衆）は、練りの時に鯨船のはらに数名付いて、流し唄、役唄（上げ唄・突き唄・祝い唄）や、宮参りを行う時の道中伊勢音頭を唄う。

流し唄は、鯨船の演技が始まるまでの間、町内や鳥出神社境内で鯨を求めて移動する時に唄われる唄で、本練りで突き終えて境内を退出する時にも唄われる。歌詞は百以上あると言われている。各組でよく唄われる唄やそうでないものがあるので、ある組で唄っているのに別の組で唄っていないからと言って、その組に元来存在していない歌詞であるかどうかは判然としない。また、同じ歌詞と言っても各組それぞれで節回しが異なっているもので、他の組に交じって一緒に唄うようなことはできないという。

役唄は、羽刺しが鯨を見つけた時から唄われる唄で、「上げる」や「上げるぞ」といった掛け声から役唄に替わる。町練りでは「沖の鵲（かごめ）」に 背美はと問えば さあ背美はくるくる」で演技を開始する。本練りでは、町練りでは唄われない特別な役唄である「安芸の宮島 廻れば七里えー」が始まる。南島組においては、鳥居を突く時にのみ唄われる特別なものとなっている。

祝い唄は、鯨が突いたことを神に感謝する唄である。鯨船行事は、羽刺しが鯨を突いた後、祝い唄が唄われ、唄の途中で神に感謝して櫓上げを行う。櫓上げが終わると、演技が終了するまで祝

い唄が唄われる。櫓上げには神に感謝するという以外にも、大物を仕留めたことを表現しているなど諸説がある。



中島組 櫓上げ



北島組 櫓上げ



古川町 櫓上げ



南島組 櫓上げ

本練りが終わり、山車を山車蔵に収納し終わると、順番に行事の無事を感じて宮参りが行われる。その道すがら竿に提げた締太鼓（古川町は長胴太鼓を用いている。）を叩きながら、道中伊勢音頭が唄われる。これらは唄というものの、中には囃子や合いの手、中には行事の切り替えの合図なども含まれる。

ここで、平成二十九年刊行の『鳥出神社の鯨船行事』継承マニュアル（以下『マニュアル』と略記する）作成時に記録された、各組の歌詞を記しておくこととする。

〔北島組〕

《流し唄》目的地まで山車を曳いて行く時の唄

○エーエーエー エー エーエー

ヘエエエーヘーエ エーエ エーサー

つつじ椿は 山坂照らす

鯛は 富田の 浜照らすやーせ

治まる お御代（みよ）やそね

○エーエーエー エー エーエー

ヘエエエーヘーエ エーエ エーサー

吉田通れば 二階から招く しかも鹿（か）の子の

振袖じやーせ おさまるお御代やそね

○エーエーエー エー エーエー

ヘエエエーヘーエ エーエ エーサー

伊勢のすだれで 目をついた お多度の荒神じやーせ

治まる お御代やそね

○エーエー エー エーイヘー
ヘエエイーヘーエ エーエ エーサー
これで松坂越したわえ でてみりや 橋じやーせ
治まる お御代やそね

《役唄》演技中に唄われる唄

○沖の鷗（かごめ）に背美はと問えば
さあ背美は来る来る のほほえ 後へ来る
おお目出度やあえーな

（鳥出神社境内での本練りの際は、この唄の前に「安芸の宮島
廻れば七里えーさあー浦は七浦のほほえ七えびす お目出
度やあー」との一唄が入る。）

○ヤサネエー ソオーラ ヨシタ（寄した） ヨシタ ヨシタ

（繰り返し）

（鯨を追い詰めていく。）

（「切るぞ」の掛け声場面が転換し、太鼓のリズムも替わる。）

○ホイッ トーモリセ

（トモ＝艦＝船尾のこと、後退を意味し、鯨の反撃が始まる。）

アー ホーリヤホーリヤ スッテンテン

アー ホーリヤホーリヤ スッテンテン

（鯨船は大きく後退させられる。）

（大きく後退させられたところで体勢を整え反撃を開始する。）
○ソオーラ 浮いたわいな

ヤサネエー ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ

（繰り返し）

○ホイッ サヨサ サヨホイ

（太鼓のリズムが速くなり、羽刺しは左手に鉾を持ち、右手で鯨
を全力で追いかける所作を行う。）

○ホイッ サヨサ サヨホイ

（繰り返し）

（太鼓が連打され、鯨が浮き上がり、太鼓の最後の「ドン」の一
発に合わせて鉾を打ち込み、見事に仕留める。）

○宮の前で 鯨を突いた

さあ これもお宮の のほほえ 御利生かえ

おお目出度やあーな

（無事に鯨を突くことができたことへの感謝の意を表す。祝い唄
とも呼ばれる。）

○嬉しゅう目出度の 若松様よ

さあ 枝も栄える のほほえ 葉も茂る

おお目出度やあえーな

○目出度目出度で 参らば渡る

さあ 伊勢の大淀（およだ）¹⁰の のほほえ 宇治橋や

おお目出度やあえーな

○惚れてたもれや 歯を染めて 尼惚れて 歯染めやあーせ

治まる お御代やそね

○治まあーの えーお御代やエーント

へーやあさ へーやさね

（「えーお御代やエーント」で艦を持ち上げ、「へーやあさ え

ーやあさね」でより高く持ち上げる。）

○いーやさーが其の子 伊勢の浦 えー鎌倉の街道越え

あー 金を貰うて ござれやせ

治まる お御代そね

（艦を下ろして互いに拍手で演技を終える。）

《道中伊勢音頭》宮参りに唄われる唄

締太鼓を叩きながら参内する

○サアヨーホイナー 明日の大漁を ヨイヨイ

鳥出の宮に アーヨイセー トーオコセ

祈る ナー あの娘は ヨーイソレサー 浜小町

アーホンマカヤー トーコーセー ヨーイヤーナ

アーリヤリヤリヤー これは伊勢ー

サーヨー イートコセー

〔中島組〕

《流し唄》

○エーヘーへ へー へーイヘーへエ

へーエーイーへーエエ へーエエ エーサー

つつじ 椿は 山坂照らす

いわしや（鰯は） 富田の 浜照らすやあーせ

治（おさ）まのお御代や トネエー

○エーヘーヘー　ヘー　ヘーイヘーヘー
ヘーエーイーヘーエエ　ヘーエエ　エーサー
沖の鵠に汐時間えば　私しや立つ鳥　波に聞けやあーさ
治まのお御代や　トネエー

《役唄》

○沖の鵠に　背美はと問えば　さあ背美は来る来る
のほほをえ

後へ来る　お目出度やー

(他の組と同様に、この唄で演技が始まる。)

(本練りでは「安芸の宮島廻れば七里えー」の歌詞で始まる。)

○ヤサネエー　ソオーラ　ヨシタ　ヨシタ　ヨシタ　ヨシタ

《繰り返し》

(「上げるぞ」との掛け声で役唄に替わる。)

○沖の鵠に　背美はと問えば(はい)　さあ背美は来る来る
のほほをえ　後に来る　お目出度やー

(「さあ」に合わせて演技が始まるが、中島組では「問えば」のあとに「はい」といった合いの手が入る。)

○ヤサネー　ソオーラ　ヨシタ　ヨシタ　ヨシタ　ヨシタ

《繰り返し》

(鯨を追い詰めていく。)

(「切るぞ」といった掛け声で唄が替わり、鯨の反撃が始まる。)

○ホイッ　サーヨーサッ

アー　ホーリヤーホーリヤ　スッテンテン

アー　ホーリヤーホーリヤ　スッテンテン

(鯨船は大きく後退させられる。)

○ソオーラ　浮いたわいな

(突かれた鯨が浮き上がる。)

ヤサネエー　ソオーラ　ヨシタ　ヨシタ　ヨシタ　ヨシタ

(再度、鯨を追い詰めるにかかる。)

ヤサネエー　ソオーラ　ヨシタ　ヨシタ　ヨシタ　ヨシタ

《繰り返し》

(「切るぞ」の合図で太鼓のリズムも替わる。)

○サヨサ　ヨサホイ　サヨサ　ヨサホイ

(太鼓も唄いも、次第にリズムが速くなってくる。)

サヨサ　ヨサホイ　サヨサ　ヨサホイ

《繰り返し》

(最後に太鼓は連打となり、一瞬、間があつて次の瞬間大きく

「ドン」と一発叩く太鼓と息を合わせて鉦が打ち込まれる。)

○宮の前で　鯨を突いた　さあ　これもお宮の　のほほをえ
御利生かえ　お目出度やー

○嬉しゅう目出度の　若松様よ

さあ　枝も栄ゆる　のほほをえ　葉も茂る　お目出度やー
目出度めでたで　参らば渡る

さあ　伊勢の大淀の　のほほをえ　宇治橋や

お目出度やー

○これでつばもれ　エイエイエイエイ　そめた

ああ　玉もろて　遊べやつせ　治まのお御代や　トネエー

○おさまの　エー　お御代や　エーント

エー　やつさ　エー　やつさネー

(「エー　やつさ」で臙上げを行う。)

○いーやさあーが　其の子　伊勢の浦エー

あー　そこじやに

(「あー　そこじやに」でもう一段高く臙を持ち上げる。)

○鎌倉の　かいへのいどう(街道)　エー

ああ　錢を貰うて　ござあれやーせ

治まのお御代や　トネエー

(臙を下ろし、演技が終わる。)

《道中伊勢音頭》締太鼓を叩きながら参内する

○ハニヨオー　ホイナアー　目出度目出度の　若松様よ

アアよー　伊勢トッコセー

枝もナー　枝も栄えて　ヨーイソーレサーア　葉もしげる

アー　ほんまかやー　トッコセー

えーよ　いやなー　ありやりやーあ　これは伊勢

サアーよおーおいしいとせえー

○サーヨオー　ホイナアー　明日はお立ちか　ヨイヨイ

お名残り惜しゅうや　アアヨー伊勢トッコセー

アア　六軒茶屋までえ送りましよ　ヨイ

六軒茶屋の曲がり戸で　ヨイ

紅葉のような手について　ヨイ

糸より細い声を出し　ヨイ

皆さんさようならお静かに　ヨイ

また来春(らいはる)も来ておくれ　ヨイ

来春来るやら来ないやら　ヨイ

姉(ねえ)さん居(い)るやら居ないやら　ヨイ

これが別れの盃と　ヨイ

思えば涙が先に立つ　ヨイ

雨のナアー　十日も　ヨイ

※御連中さんよ　降れば　ヨイ

※アー　ほんまかや　トッコセー

※えーよー　いやなー　ありやりやーあ　これは伊勢

サアー　よおーおいしいとせえー

「鯨船の歌揚並に囃子・盆おどりの歌」と題した横長のミニ冊子がある。これは、中島組の台船の実測を行っている年に、年配の方から参考にということで頂いたものである。発行年は不明である。ただ、本文中の最新の年月が「昭和四十七年七月」であるので、それ以降のものであると考えられる。

内容は、「鯨船の歌揚並に囃子」として「役唄」、「流し唄」、「伊勢音頭」、そして伊勢音頭の「明日はお立ちか…」からの部分を「別れの唄」と特記している。その他、「盆おどりの歌」「富田音頭」、そして「富田沿革」として富田の謂れを短く記し、道中伊勢音頭の歌詞「鯨船の出現」として中島組の櫓の金具の裏に文久四年の記載が発見されたことや、これまでの修理に年月日が記されている。最後に、再び道中伊勢音頭の歌詞と思われるものを記して終わっている。

「流し唄」については、かなり詳しく採録されているので『マニアル』に記載のないものを挙げておくこととする。

○これで松阪こえたえー

出てみりや橋じゃあーせ

○沖をみやんせあぐりがためた

泗水がよいがまたできたやあーせ

○いわし小いわしえらい事じゃ

めでたの秋じゃやあーせ

○伊勢のすだれで目をついた

お多度の荒神じゃやあーせ

○たいこたゝきはどなたつでござる

富田の清助（せすけ）じゃやーせ

○今年や世が世で穂に穂が咲いた

榊はそのけみではかれやーせ

○吉田とおれば二階で招く

しかもかのこの振袖じゃやあーせ

○お杉お玉に銭百なげた

そつちもこつちもがつてんじや

○四国西国巡礼まわる

木札が胸ややあーせ

○坂はてるてる鈴鹿はくもる

合の土山雨が降る

○関の御前は亀山通い

月にな足袋とせきだは二十五足

○太鼓つづみの音がするえー

若衆の寄り合いじゃやあーせ

○あみをかけよまいかえー

かごめの沖じゃやあーせ

続いて「伊勢音頭」として以下の歌詞が記されている。

○めでためでたの若松さまよ

枝も栄えて 葉も茂る

○お伊勢参りに扇をひろて

扇めでたや末末繁昌

○わしが国さはお伊勢に遠い

お伊勢恋しや 参いりたや

○帯に短かしたすきに長し

お伊勢まいりの 笠のひも

○伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ

尾張名古屋は 城で持つ

次に、前述のとおり「明日はお立ちか」からの歌を「別れの歌」と特記しているが、そのうち先に※を付した箇所には次のような記載があるので指摘しておくこととする。

○御連中さんよー

降れエばーアアよーオオい

ヤートコセイエエーヨイ ヤナー

弥長 世 恰 弥 成

アララーコレ ハイセイエエ

安楽樂是者 伊勢

ヨーオオイーイトーセイ

コノ善所 伊勢

「鯨船の出現」の前後に記された道中伊勢音頭の歌詞とみられる部分を転載する。

○伊勢の富田の一本松は

今は枯れてもヨーイー

名をのこすー

○一度おいでよ富田の里へ

春の十四の 桜見にー

○ハニヨー ホイナー

富田よいとこ

前にはー 海よー

ハヽ 後はー 鈴鹿のやまでー

春はー なたねの花がさくー

秋はー こがねのほがたれるー

ちよいと浜辺をみるなればー

蒸気船やらー 帆巻船ー

水にかべしかもめ鳥ー

足をばー ろにしてー かいにしてー

羽をば帆にしてー 船遊ぶ

空飛ぶ鳥さえあのようにー

夫婦仲よく暮らすのにー

なぜになー 私等がようー

それさー ままならー ぬー

○ハニヨー ホイナー

わしとお前さんは 将ぎの駒よー

あゝ 飛車び車ふくめて 香すまで

とんだ桂馬のうわいさつウー

私も女房の角じゃもの

金銀使つて下さるなあー

ばんのなー上では ヨウイーサ

ほんとになー 王手さす ソーラ

（「お目出えたーい」で船体を後ろに下げ、艀上げの準備をする。）

○惚れてたもれや 齒を染めた

尼ぼれ 齒染めやあーせ ヤレコラ

治まの お御代えー

アアエーント エーシヤント

エーヤツサー エーヤツサーネー

（「アアエーント」からの掛け声に合わせて船体を左右に振る。）

○いーやっさー が其の子を 伊勢の浦えー

あーそこじゃに

（「あーそこじゃに」で一氣に艀を持ち上げる。）

○鎌倉の のをー いへい かいどうえ

さあ錢をもらおーて ござあれやあーせ

（ここで艀を下ろし、演技が終了する。）

《道中伊勢音頭》締太鼓を叩きながら参内する

○サアヨーホイナー 目出度目出度の ヨイヨイ

若松様よ アーヨオイセートーオコセ

枝もナー 栄える ヨーイソレサー 葉も繁る

アーホンマカヤー トーコーセーエ

ヨーイヤナ アーリヤリヤリヤ これは伊勢

サーヨー イイトコ セー

○サアヨーホイナー 伊勢は津でもつ ヨイヨイ

津は伊勢でもつ アーヨオイセートーオコセ

尾張ナー 名古屋は ヨーイソレサー 城でもつ

アーホンマカヤー トーコーセーエ

ヨーイヤナ アーリヤリヤリヤ これは伊勢

サーヨー イイトコ セー

〔古川町〕

《流し唄》

○エーヘーヘーエーエーエーヘーエ

エーエーヘーヘーエーエー

エッサー サアヨー ヨシターヨシター

太鼓叩きは どなたでござる

あー富田の 清助じゃやあーせ

○エーヘーヘーエーエーエーヘーエ

エーエーヘーヘーエーエー

エッサー サアヨー ヨシターヨシター

沖を見やんせ あぐりがためた

泗水（しすい）がよいが またできたやーせ

《役唄》

○安芸の宮島廻れば七里えー

さあー浦そ七浦のほほを七えびす お目出度あやー

（本練りの時に限りこの歌詞が唄われ、「上がった」状態になり、町練りの際は次の「沖の鷗」の歌詞で「上がった」状態となる。）

○沖の鷗が後ろへ浮いた

さあ 背美はくるくる のほほえ 後へくる

お目出たーい

（「背美はくるくる」で演技が始まる。上げ唄とも言う。）

本練りの時は「安芸の宮島廻れば七里えー」の歌詞で始まる。）

○ヤサネー ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ

《繰り返し》

（鯨を追い詰めていく。）

（「切るぞ」などの掛け声で場面が転換する。）

○サーヨーサー

ホーリヤー ホーリヤー スッテンテン

ホーリヤー ホーリヤー スッテンテン

（鯨の反撃が始まり、鯨船は大きく後退させられる。）

○浮いたわえ

ヤサネー ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ

（鯨が浮き上がり、鯨船が再度鯨を追いかける。）

○サヨサ サヨエー サヨサ サヨエー

サヨサ サヨサ

（太鼓のリズムが速くなり、最後の一発「ドン」に合わせて鉦を打ち込む。）

○お宮の前で鯨を突いたえー

さあ お目出度ーえ

○嬉し目出度の若松様よ さあ 枝も栄える のほほえ

葉も茂る お目出度ーえ

○目出度目出度で参るえー

さあ 伊勢の大淀の のほほえ 宇治橋や

お目出度ーえ

○これで妻アー妻 齒を染めた 尼惚れ 齒染めやあーせ

アーソコジャ 治まの お御代え

アアエーント エーシヤントセ

エーヤツサー エーヤツサーネー

（「アアエーント」のタイミングで艀を上げ、「エンヤ エンヤ」の掛け声を掛ける。）

○いーやっさあー が其の子を 伊勢の浦えー

あーそこじゃに

（「あーそこじゃに」で艀を上げたまま、時計周りに百八十度山車を回転させる。）

○鎌倉の街道えー

さあー錢をもつて ござあれやあーせ

（この歌詞の終わりに合わせて回転させて艀を下ろし、演技は終了する。）

《道中伊勢音頭》長胴太鼓を叩きながら参内する

○サアヨーホイナ― 古い時代の ヨイヨイ

あの鯨船 サ―ヨイセト―コセ―

遠路ナ― ゆかりの ヨ―ソレサ 宝物

ホンマカヤー ト―コーセ― ヨーイヤナ

アーリヤリヤリヤ コレハイセ サ―ヨオイ―イトセ―

○サアヨーホイナ― 昔々の ヨイヨイ

そのまた昔 ハアヨーイトセ―ト―コセ

三重の富田の 浜に出て ヨイ

以下、古川町のみに伝えられるお伊勢詣での親子の鯨を突いた話が唄われているが、『マニユアル』採録時はその内容が親子ではなく一頭の鯨の唄となっており、また歌詞の省略があるため、後述するように『報告書』に採録されている歌詞を補うこととする。また*を付けた箇所には後述の歌詞が入る。

*1 遥かに沖を 見るならば ヨイ

突然あがるは 水柱 ヨイ

これぞ潮吹く 鯨かな ヨイ

漁師は勇んで 船を出し ヨイ

ハダシは舳先で 銚を上げ ヨイ

力一杯櫓を漕いで ヨイ

船は鯨を 追って行く ヨイ

*2 その時鯨の 言うことにや ヨイ

わしらは 遥か紀州から ヨイ

お伊勢参りに やって来た ヨイ

せめてお参り 済むまでは ヨイ

どうか見逃し 下されや ヨイ

*3 それでも漁師は その鯨（その鯨）『報告書』には「子鯨を」とする） ヨイ

射止めてしまつて それから ヨイ

富田の浜は 寂れたり ヨイ

来る日も来る日も 漁は無し ヨイ

二度と鯨を 取りません ヨイ

年に一度の お祭りに ヨイ

鯨取りをば 忍びます ヨイ

これがナ―富田の祭りの ヨーイソーレサエ

はじまりよ

ホンマカヤー ト―コーセ― ヨーイヤナ

アーリヤリヤリヤ コレハイセ サ―ヨオイ―イトセ―

○サアヨーホイナ― 神々とお寺 ヨイヨイ

お参りするなら ハアヨーイトセ―ト―コセ

一に伊勢の大神宮 ヨイ

二は日光東照宮 ヨイ

三で讃岐の金毘羅山 ヨイ

四で信濃の善光寺 ヨイ

五つ出雲の大社 ヨイ

六つ武蔵の六角堂（？） ヨイ

七つ名古屋の熱田さん ヨイ

八つやせ（？）の観音さん ヨイ

九で熊野の権現さん ヨイ

十で富田の ヨーイソーレサエ 鳥出さん（？）

ホンマカヤー ト―コーセ― ヨーイヤナ

アーリヤリヤリヤ コレハイセ サ―ヨオイ―イトセ―

《『報告書』に採録されて、今回採録されなかった歌詞》

『報告書』では古川町の歌詞について二か所で触れられていて、今回の調査では採録されていない歌詞がかなりある¹¹。また、採録されていても、かなり省略されたものになっている歌詞もある。これらの歌詞の中には、他の組で採録された類似の歌詞もあるが、古川町では採録されていないものを記載する。

『報告書』第三章、第一節に採録された歌詞

《流し唄》

○これで松阪こえたえ― 出てみりや橋じやあ―せ

○つつじつばきは山坂でらす いわしは富田の浜でらすやあ―
せ

○沖の鷗にしおどききけば 私しや立つ鳥波にきけやあ―せ

○いわし小いわしえらい事じや めでたの秋じやややあ―せ

○伊勢のすだれで目をついた お多度の荒神じやややあ―せ

○今年や世が世で穂に穂が咲いた 榊はそのけみではかれや
―せ

○吉田とおれば二階で招く しかもかのこの振袖じややあ―せ

○お杉お玉に銭百なげた そつちもこつちもがつてんじや

○四国西国巡礼まわる 木札が胸ややあ―せ

○坂はてるてるスズカはくもる 合の土山雨がふる

○関の御前は亀山通い 月に足袋とせきだは二五足

○太鼓つづみの音がするえ― 若衆の寄り合いじややあ―せ

○網をかけよまいかえ― かごめの沖じややあ―せ

○ささの小舟ちよいとのせた おもいやつは沈むやあ―せ

○ぼんさぼんさとお三とねたら 膝子もうけたやあ―せ

○どこの紺屋がそめたやら はしばしやかのこやあ―せ

○じしやくわすれて夜に入る時は ちいそ星みてあてじやあ―
せ

○東しらんで夜があけたえ ねもせでまよたえあ―せ

○ささぎつまんす女郎はえ 赤いいまきが一寸見えろや―せ

○門からくりまで皆見える 清水寺じやや―せ

○これでつばふば染めたえ― 玉棒で齒染めたや―せ

《役唄》

○秋の宮島廻れば七里え― さあこれもお宮ののほほえ御利生
かえ

『報告書』第三章、第四節に採録された歌詞（第一節で採録された歌詞及び他の組の歌詞として採録されたものは省略する。以下同）

《流し唄》

○あいの山を通ればえー お杉お玉やあーせ

○吉野に小さくらので武士えー たからおにもみじやあーせ

○秋田夜中に通ればえー さかづきごとややあーせ

○かみをゆうて進上かえー 細まげ小まげやあーせ

○伊勢のさいくが皆見えるえー さど買うて紹もれややあーせ

○どこの大工がたてたやらえー もりそな寺じややあーせ

○たいこやぐらにちよいとのせたえー 下からせせるやあーせ

○お杉お玉が百姓の子ならえー 金のはしかけ宮川えやあーせ

○きたらさせます七月腹をえー 芋の中うち子にさわるやあせ

○深い河を渡る時はえー ぼぼの毛にえびがかごむやあーせ

○きりようのよい子が二人居るえー ねもせでまよたやあーせ

○今の若衆のくせはえー したいのがくせややあーせ

○道ばたのたけのこはえー ずんべらぼうとぬけたやあーせ

○東黒部の塩たきはえー 目元は塩じややあーせ

○芋の葉のつゆわえー さわればおちるやあーせ

○ところ天などしやれえー こしようかけ溜りかけじややあーせ

○一畝二畝の川じやないえー 三畝、四畝、七畝、やあーせ

○深い川を渡るときはえー ボボの家にエビがかごむやあーせ

○あの娘かわいいやボタ餅顔でえー キナコ付けたらなおよかるうやあーせ

○富田港で鯨がとれたえー うれし目出度の宮参りやあーせ

○宮の熱田のならずの梅はえー 花は咲いても実はならぬやあーせ

○伊勢の港に瀬は二つえー 思い切る瀬と切らぬ瀬とやあーせ
○鯛の塩焼き鮑の酢貝えー それで呑みや尚よかるうやあーせ
○伊勢は宇治橋津は岩田橋えー 富田港は思案橋やあーせ

《道中伊勢音頭》

○サアヨーホイナー 目出度目出度の ヨイヨイ

○家○家にハアヨイセートーコセ

鶴がナー御門に ヨーイソーレサ 巢をかけた

※ホンマカヤートーコーセー ヨーイヤナー アリヤリヤリヤ
コレハイセ サーヨイートセ

○お伊勢音頭に 心が浮いた わしも踊るか 輪の中で

○伊勢はよいとこ 菜の花つづき 歌もなつかし 伊勢音頭

○帯に短し たすきに長し お伊勢参りの 傘の紐

○お伊勢なつかし ご先祖様が 呼んでいるよな 春の風

○お伊勢参りは 朝熊をかける 朝熊かけねば 片参り

○伊勢の旅路の うれしいものは 道の眺めと 伊勢音頭

○わしの国さは お伊勢に遠い 伊勢が恋しや 参りたや

○馬は豆好き 馬子酒が好き 乗せたお客は 歌が好き

○親の意見と なすびの花は 千に一つの 無駄はない

○雪の降る夜は 来ないでおくれ かくしきれない 下駄のあと

○よせばよいのに 舌切り雀 ちよいとなめたが 身のみまり

○伊勢へ伊勢へと かやの穂もなびく 伊勢はかや葺き こけらぶき

○太鼓つづみの 音がする あれは若衆の 寄り合いじや

○伊勢の富田の 浜に出て

※1漁師は網の 縛ろいか（繕いカ）

（中略、以下「中略」とした箇所先掲の道中 伊勢音頭の歌詞が入る、以下同）

※2鯨は必死に 逃げ惑い 海中深く 隠れたり

再び鯨は 海面に 二頭は子鯨 一頭は 大きな鯨かな

親の鯨は 子鯨に 体をびったり 寄せながら

必死に子鯨 かばいつつ 漁師の漕ぐ手は 休みなく

親子の鯨に 近付いて ハダシは銚を 高々と

「一番銚だ」と 構えたり

（中略）

※3鯨の目には涙かな

しかしハダシは 親鯨 めがけて銚を 打ち立てた

みるみる海は 血で染まり 苦しみ悶える 親鯨

最後の力を 振り絞り 「子供だけは お助け願います」

（中略）

※（繰り返し）

○サアーヨーホイナー 伊勢の富田は ヨイヨイ

歴史の町よ ハアヨイセートーコセ

東海道は 間の宿 焼き蛤が名物で

姉さん被りの 娘たち 赤い湯巻を ちよつと出して

盛んに呼び声 上げている

お伊勢参りも 賑やかに

江戸の其角が、詠うには「蛤の焼かれて鳴くやホトトギス」

もう一つの 名物 盆の祭りの 鯨船

大きな鯨を お宮の前へ 追い込んで

金銀飾った どえらい立派な 鯨船という船に

多勢の若い衆が 付き添って お宮の中へ と練り込んで

大きな鯨を 打取れば これが富田の 盆の祭の鯨取り

ちよいと浜辺を 見るならば 蒸気船や 帆前船

地引網やら あぐり網 沖はカモメか 白雲か

いわし小わし（小いわし力） 大漁で

ノボリを はためき 櫓拍子高く 漕いでくる

娘達やら おっ母さん 浜はよろこび 大さわぎ

その名も高き 富田浜 時の流れに 真砂消え

今はナー昔の ヨーイソーレサエ ものがたり

※（繰り返し）

○サアーホイナー 明日はお立ちか ヨイヨイ

お名残り惜しゆや ハアヨイセートーコセ

富田の浜まで 送りましょう 富田の浜の 船宿で
旅の垢をば 湯で流し 腕はしつかと 抱き茗荷
足はキリリと 藤の花

富田の浜より 船出して 大波小波に 棹さして
揺られナー 揺られて ヨーイソーレサエ 舵を取る

※（繰り返し）

○アーホイナー 明日はお立ちか ヨイヨイ
お名残り惜しゆや ハアヨーイセートーコセ
六軒茶屋まで 送りましょ

（この歌詞、中島組に採録のため、以下省略）

○カンカンづくしで申しましょ みかん きんかん 酒のかん
親はせっかん 子は聞かん 鶏はだしで 足突かん
相撲取りはだかで 風邪引かん
犬はナー くそして尻ふかん

※（繰り返し）

○尾張名古屋の 金のしゃちほこよ
金の鯨様の いうことにや

花のお江戸は 東京の 博覧会¹²に さらにされて
あれが鯨よ あれが鯨よ と指さされ

これほどくやしい ことはない いっそ死んで しまいたい
一人で死ぬのは よいけれど お前さんと二人で死んだなら
あれはナー 心中（真鍮）だと 他人はいう

○ものの始めを 一という 車に積んだ 荷という

障子のたてよこ 棧という 子供の小便 シーという
白黒並べて 碁という 大名の知行を 禄という
俺達のやりくり 質という 団子をこねるを 鉢という
こねた団子を 食うという 水に焼金ナー ジューという

※（繰り返し）

○サアヨーホイナー 今日良き日で ヨイヨイ
お目出度や ハアヨーイセートーコセ
三々九度の 式済んで 新郎新婦は床の中
ああそれなのに それなのに
鶴さんと 亀さんの 夫婦喧嘩が 始まって

そこで鶴さんの 言うことにや
これこれ亀さん わしのからだで

首が長いのが 嫌なのか 足が長いのが 嫌なのか
そこで亀さんの 申すには もしもし鶴さん

お前さんの からだで なんにも不足は 無いけれど
お前さんの命が千年で 私の命が万年で

お前さんが死んだ その後で
九千年のナー 長後家するのが ヨーイソーレサエ

わしや辛い

※（繰り返し）

○鶴と亀との 仲良し夫婦です ある日大喧嘩が ありまして
そこで鶴さんの 言うことにや

私の首が長いのが 嫌なのか 足が長いのが 嫌なのか

くちばしが長いのが 嫌なのか

それとも 頭が赤いのが 嫌なのか

そこで亀さんの 言うことにや これこれ鶴さん何を言う

お前さんの からだに 何の不足は 無いけれど

お前さんの寿命が千年で 私の寿命が万年じゃ

お前さんが死んだ その後で

九千年ものナー 長後家するのが ヨーイソーレサエ

わしや辛い

※（繰り返し）

○サアヨーホイナー

娘十七、八は ヨイヨイ

嫁入りごろよ ハアヨーイセートーコセ

箆笥 長持 挟み箱

あま台 鏡台 化粧台

おまんこ洗いのたらいまで

これ程持たせて やるからにや

出されて戻るな 出て来るな

そこで娘さん 言うことにや

これこれ父さん どりや無理よ

ものの例えにあるように

西が曇れば 雨とやら

東が曇れば 風とやら

北が曇れば 雪とやら

南が一方 開いたとて

千石積んだ宝船

港出るときや 良い日でも

波がナー 荒けりや ヨーイソーレサエ

出て戻る

※（繰り返し）

○ナカナカづくしで 申しましょ

日本は地球の 真ん中で

富田は日本の 真ん中で

わたしや富田の 真ん中で

おへそはおなかの 真ん中で

そのへそ 三寸下 下がったところに

三つのお寺が ありまして

右にあるのが毛願寺

左にあるのが 土手願寺

その真ん中が 穴願寺

夜の夜中の 真夜中に

くるくる頭の 坊さんが

袈裟も掛けずに いそがしく

何のお参りか 知らないが

門を出たり 入ったり

有り難う有り難うと 白い涙をヨーイソーレサエ

流された

※（繰り返し）

○ますますづくしで 申すなら

一合桝 二合桝 三合桝

四合桝 五合桝 六合桝

七合桝 八合桝 九合桝

一升になったら 持ち上げます

六、提灯台

ハマの三組では、各町の自治会が提灯台を設置して、それぞれ意匠を凝らした提灯を十四日の朝に飾り付ける。古川町には、提灯台を飾る風習が無いので行わない。提灯台の基本的な構造は、門型に屋根を置き、横棧を上下2本通し、その長方形の中を6本の縦木で7つに区切り、その中に7つの提灯を横棧の上下に留めて中にライトを仕込む。夜にはこれに灯を入れる意匠を凝らしたものが多く、ライトを点けると夜の通りに映えて見ものである。また、鯨船山車が通る時は山車が提灯に当たるため提灯は外され、門型のみとなる。

そもそも提灯台とは、お盆の時、帰ってくる先祖の目印となる門提灯の変形であると考えられる。それを町ごとに飾る事は、まさに盆行事といって良い飾り付けと言える。

帆、石山の秋月、瀬田の夕照、三井の晩鐘、堅田の落雁、唐崎の夜雨、栗津の晴嵐）の絵柄を描く。

〔中島組〕

本町にはかつて他の町と同様に神武天皇一代記を描いた提灯台があった。しかし、昭和三十九年に本町通りが国道1号線と23号線を結ぶ道路となったため、他の町のように道の真ん中に提灯台を設置することができなくなった。そのため、平成十二年に「せせらぎ広場」の敷地の入り口にある鉄の橋の手前の両側に大きな提灯一对を設置するようになった。提灯は1本の支柱に屋根を付けて、その下に提灯を下げる。絵柄は、鳥出神社の神紋である左巴の三つ巴を向かって右手に、上り藤を左手に描き、中央に大きく「御神燈」と書く。両方の提灯は国道1号線を向いており、向かって右側の提灯の裏面には「本町自治会」と記し、もう一方の裏には何も書いていない。



中島組 一对の提灯

寺町は、平安時代末期の治承・寿永の乱（源平合戦）の時代の武者絵（巴御前、源義経、那須与一、石橋山の合戦、木曾義仲と源義経が宇治川で対峙したとき、義経方の佐々木高綱・梶原景季

〔北島組〕

新町二区は、鳥出神社の神紋である左巴の三つ巴紋を右斜め上に配し、上り藤紋を左斜め下に配して描く。

新町一区では、七福神（大黒天・蛭子・毘沙門・弁財天・福祿寿・寿老人・布袋）の絵柄に裏には「御神燈」（北島組の蛭子町と南島組の北納屋町は「敬神燭」と表記する）と書いた提灯を飾り、真ん中の提灯だけ向きを反対にして掲げる。真ん中だけ向きを変えるこの形式は、中島組の本町を除くどの町にも共通する。

蛭子町は、建武中興の武者絵で、楠正行の如意輪堂、新田義貞の稲村ヶ崎、楠正成と楠正行の桜井の駅の別れ、後醍醐天皇を背負う船上山の名和長年の絵柄を描く。

天神町は、新町第二区と同じく鳥出神社の神紋である三つ巴と上り藤を斜めに配して描く。

中川町は、忠臣蔵を描き、大石内蔵助と吉良上野介、雪の吉良邸における清水一学の二刀流、赤垣源藏徳利の別れ、神崎与五郎堪忍の図、村上喜剣と大石内蔵助、赤穂城の明け渡し、松の廊下の刃傷事件の芝居の絵柄を描く。

北魚町は、中国の洞庭湖および湘江から支流の瀟水にかけての「瀟湘八景図」になぞらえた近江八景（比良の暮雪、矢橋の帰



提灯 七福神

が、源頼朝から与えられた名馬 生唆・磨墨で先陣を争った故事、熊谷直実が平敦盛を打ち取る、鎮西八郎為朝などの人々や逸話が描かれている。寺町でも他の町と同様に、真ん中の一つの提灯だけを裏向きにして飾る。

〔南島組〕

南魚町では、記紀や風土記の中の日本武尊（倭建命）がテーマとなっている。内容は、熊曾の兄建、景行天皇の御世、日本武尊の尊号、伊勢神宮に叔母倭姫を訪れ草薙剣と火打石を授けられる場面、賊らが狩猟中の日本武尊に危害を加える、東夷が火を原野に放つ、伊吹山の山神の毒気で病となり伊勢国で死去した絵柄を描いている。

城町は、賤ヶ岳の戦いで秀吉が柴田勝家らと戦った際に勇名をはせた、羽柴秀吉の近習の7人、七本槍の武者絵（加藤清正・脇坂安治・片桐且元・加藤嘉明・平野長泰・福島正則・糟屋武則）を描く。

片町も城町と同じく、賤ヶ岳七本槍の武者絵を描く。

北納屋町は七福神の絵柄を描く。

中納屋町の提灯の絵柄は、七福神の絵柄を描く。

南納屋町の提灯台の位置は、他の東富田町の自治会のように中横町に沿わず、国道1号線に面して建てられている。提灯の絵柄は、賤ヶ岳七本槍の武者絵を描く。

¹ 北島組は平成二十三年度に、中島組は令和元年度、南島組は平成二十二年、そして、古川町は平成二十年度に横幕の復元新調事業を行っている。

² 南島組感應丸のサガリは、過去に復元新調されている。旧サガリは、北島組同様に金糸掛け網が使用されており、結び方も二重堅結びであった。

³ 北島組神社丸のサガリは、平成二十四年度に復元新調事業を行っている。

⁴ 地元への聞き取りによると、平成二十七年、度から行われるようになったという。なお、平成十年に撮影された町練り最後の多度大社の鯨突きの写真をみると、大人の鯨が二頭出演していることが確認できる。このことから、古川町では、いつの時期からか、鯨が二頭出演する形式が出来上がってきて、そのうちの二頭が子鯨に変化したものとして理解できる。

⁵ 令和4年度に「令和3年度補正予算事業 文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）」を受け、北島組二着、中島組一着、南島組三着、古川町二着を復元新調している。

⁶ 鉢巻きをこめかみで結ぶという想起されるのは、江戸時代の大名家などが病の時に左のこめかみで結ぶ病鉢巻きである。この鉢巻きは、生薬の紫根で染めた濃い紫（江戸紫）色で消炎作用があると考えられた。羽刺しの鉢巻きが、薄い水色で統一されているのも何か

関係があるのかもしれない。左右のこめかみのところで持ち上げて結び、その先が所作で頭を振るたびに翻るのも、何らかの意味があるのか、あるいは芸能としての見せどころなのかもしれない。

⁷ 平成二十七年以降の町練りでは、ドンザを羽織って行っているのは中島組と南島組だけである。中島組の本練りではもろ肌脱ぎにせず、きちんと羽織ったまま最後まで演技を行うが、南島組では町練りと同様にもろ肌脱ぎとなる。

⁸ セミクジラの事。

⁹ 古川町でも町練りなどではこの原則で行われているが、本練りでは子鯨がいることが影響しているため、必ずしもこの原則に従っていないように見受けられる時もある。

¹⁰ 大淀は現在では「おおよど」、本来の地元音では「おいず」である。これは本来「やまだ」であるとみられるが、音に従って「大淀」の文字をあてたのであろう。これを文字に従って「おおよど」と呼んだのが訛って「およだ」となったものであると考えられる。

¹¹ 第三章の第一節および第四節に採録されており、両者に差異がある。

¹² 明治五年（一八七二）に文部省博物館が主催して開催された湯島聖堂博覧会に展示された。この金鯢の展示が目玉となって多くの人が訪れたという。

第四章 祭礼行事

一、事前練習

各組では時期や期間、方法などが少しずつ異なるものの、太鼓と唄い、羽刺しの事前練習を行う。三者揃って練習するのが基本であるが、羽刺しの所作のための練習が主たる目的であると言ってもよいだろう。

太鼓

鯨船の動きは全て太鼓に合わせて行われるので、太鼓の調子や叩き方は大事なポイントとなってくる。

太鼓は、すでに習得しているものが見本で叩いたり、まだ若手の太鼓叩きが、叩き方を復習し思い出したりする機会となっている。また、唄いに合わせて叩くタイミングなど、未熟なところを直されたりもする。上手に叩けない者は、自主練習をして叩けるようになってから出てくるようである。

中島組では、最後の正当な継承者と言われた人物に以前から叩き方を習っており、その継承に腐心し、記録映像を残すなどしている。本番を控えた事前練習以外にも、別に毎月2回、継承のための練習会



太鼓の事前練習

を日曜日午後1時から3時まで、通年で行っているという。また、太鼓譜も作ってはあがるが、太鼓の叩ける者でないと理解しづらいようである。

古川町では、太鼓叩きの音を聞きながら、紙に書かれた何かを見ながら撥を持って練習を行っていたのを見かけたことがあるので、やはり太鼓譜のようなものがあるのかもしれない。

唄い

唄いの練習は、発声練習のようなものであるか。歌詞に関しては、非常に多くの種類があり、過去に唄われていた歌詞で今は失われてしまっているものも数多くあるという。組によっては、代表的な歌詞であろうか、歌詞を印刷したものや、扇子や団扇に歌詞を印刷したものを持って練習している組員を散見する。

唄い出しは、通常、誰がとか、誰からとかは決まっていないよう、タイミング良く唄い出した者の歌詞に合わせて皆が唄い出す。そのため、人によって得意な歌詞があり、消えていく歌詞も出てくるのである。ただ、北島組には現在、唄を得意とする唄い手が一人いるため、その人物が先導して唄い出すようになっていようである。



歌詞が印刷された扇子

羽刺し

羽刺しは、いわばこの行事の主役で、真夏の炎天下で衣装を重ね着して踊り続ける。その運動量と熱量は相当なもので、過酷を極める。

羽刺しの所作はさほど複雑ではないが、手のあげ方、扇の扱い、手の振り、ひじの張り方、指先まで意識を向けることが求められ、行事が近づく、唄いや太鼓に合わせて毎晩のように練習が行われる。

事前練習で一から所作の練習を先輩や長老から教わる人が多いが、すでに経験者などから所作を教わり、踊れるようになってくる者もいる。そしてこの場で、細かな手や扇の使い方、所作の直しを受けるのである。

事前練習の場合は、祭り本番に向けたそれぞれの役割を磨き上げる場となっているのである。



船上練習

〔北島組〕

六月の中旬から始めて、週2日で6週間、18時から20時の夜2時間程度行われる。場所は東富田公園にテントを張り、縁台を出し、ライトを点けて行われる。太鼓は、長胴太鼓、桶胴太鼓の双方が用いられている。

終盤になると、山車蔵から飾り付けの終わった鯨船山車を曳き出し、公園で船上練習が行われる。

〔中島組〕

先述のとおり継承のため、月2回、日曜日の13時から15時に通年練習が行われている。本番前は七月の第4週から八月第1週の2週間18時から20時頃まで、中島組の浜にテントを張り、縁台にシートを敷き、ライトを点けて行われる。周りを囲んだ唄衆たちの唄に合わせて、太鼓や羽刺しの練習が行われる。この練習には桶胴太鼓が使われている。また、中島組は、山車蔵が離れているため船上練習などは行わない。

〔南島組〕

七月中旬から日曜日を除く毎日、19時から21時まで、南島組の浜にテントを張り、縁台やござを敷き、ライトを点けて行われている。縁台やパイプ椅子に腰かけた唄衆の唄に合わせて太鼓や羽刺しの練習が行われる。南島組も練習には桶胴太鼓が用いられている。

羽刺しや太鼓叩きが演技を習得した後に、最後の仕上げとして組み立てを終えた鯨船の船上で昼間に練習が行われる。この際には、櫓漕ぎも加わっての練習となる。

〔古川町〕

八月に入ってから、土曜日と日曜日を除いて毎日19時から21時頃まで、山車蔵の前で縁台やござを敷き、ライトを点けて行われる。唄衆がベンチやパイプ椅子などに座して唄い、それに合わせて太鼓の練習が行われ、習得が来ると、山車蔵の前に山車を半分出して船上練習が行われる。古川町では、練習にも長胴太鼓が用いている。また、唄いは歌詞の印刷された団扇を持ち、歌詞を見ながら唄う者もいる。

二、鎮火祭

鳥出神社の鯨船行事は、八月十五日に行われる例大祭に奉納する行事であるが、前日の十四日にそれぞれの町内を練り歩く「町練り」が行われる。それに先立って、まず、町内の平安と祭りの安全を祈願してお祓いが行われる。これを「鎮火祭」と称し、北島組↓中島組↓南島組↓古川町の順に行われ、祭りに使う衣装や道具も全てお祓いを受ける。

「天下の勇祭」と称されるほどに、鳥出神社の鯨船行事は荒々しい祭りであるが、鎮火祭の朝は静かに始まる。

時間になると、各町から真竹に麦わらを編んで作った保駄に紙垂を取り付けたものを前後に二つ下げた松明を持って、鳥出神社に参内する。この松明は各町の自治会単位で作られるが、概ね形は似通ったものであり、それを鯨船組が持つて参内する。なお、



お祓いを受ける様子



十字に置かれた松明



大きく燃える松明

最初の組が参内すると境内の中心に御幣を立ててあって、松明を置く場所の目安となるが、次の組からは燃えてしまつて見ることがない。

〔北島組〕

行事に出る年は必ず最初に入るので、境内の中心辺りに立てられた御幣を目安に、各町の六本の松明を縦横十字字に置いてから、神楽殿に向かってお祓いを受ける。この時、人も衣装も祭りに使う道具もお祓いを受け、最後に会長はじめ代表者数名が玉串奉奠を行う。全て終わると、風除けの筒の付いた金属製の燭台に取り付けた蠟燭に移した御神火を神主から受け取り境内に向かう。わらの部分に火を点け、大きく燃え上がるのを見て町内へと戻っていく。境内に立てた御幣はこれで燃えてしまうため、次の組からは前の組の燃えかすの上に積み重ねて燃やすことになる。

〔中島組〕

鎮火祭の松明は各自治会単位で製作され、町の数と同じ二本の松明を持って参内する。まだ前の組の火が燃えているので、火のかからない場所に松明をよけて置いて拝殿に向かう。人も道具や衣装もお祓いを受け、玉串奉奠を行う。

その後、神主から蠟燭に移した御神火を受け取り、二本の松明の保駄に火を一つずつ点けてから、前の組の燃えかすの上に置き、燃える炎と煙で体を清めてから山車蔵へ船を出しに行く。

〔南島組〕

お祓いを受ける次第はどの組も同様であるが、南島組は松明を六本持つて、その内の一本の松明の片方の保駄だけに火を点け、燃えかすの上に置き、残りは火を点けずに同じ向きで次々とその上に載せていき、大きく燃え上がるのを見て、町へ戻り町練りを行う。

〔古川町〕

三本の松明を持つて参内し、お祓いを受ける。古川町はハマの三組とは異なり、町の数ではなく、三本の松明を焚き上げる。その松明も一本の真竹に保駄を前後に二つつ取り付け、一本に四つの保駄を付けている。また、古川町だけは、事前の祈禱を受けていないので、この時御幣を清めてもらい、後に鉾持たせに取り付ける。

三、町練り

鎮火祭が済むと、それぞれの組に戻り、鯨船山車が山車蔵から曳き出されて、ハリボテの鯨を町内の路地で突く町練りが行われる。最初に突く場所は組によって異なるが、練り受けと言って、祝い事があつて祝儀を出した家を突く「祝儀突き」や、自治会長などの役付きの人の家を突く「役突き」、羽刺しや櫓漕ぎなどを出した家でも梵天を立てて鯨突きが行われる。

〔北島組〕

最初、鯨船山車には太鼓叩きだけが乗り込み、山車を曳き出す。その後、太鼓がリズムを刻み、流し唄を唄いながら最初に鯨突きを行い始める場所まで移動して行く。到着すると、突きを行う家に梵天が立てられ、羽刺しをはじめとして櫓漕ぎ・腰持ち・足持ち・太鼓叩きといった乗り手が乗り込み、町練りを始める。突く順番は、一番北の新町二区から順番に南へ突いていく。

「上げるぞ」などと掛け声で、羽刺しは立ち上がる。流し唄から「沖の鷗に背美はと問えば さあ背美はくるくる」という役唄へと替わり、右手一本で扇を広げて目線にかざし右足を腰持ちに支えられ、鯨を見つけた所作を行う。「のほほをえ」の唄い終わりに、羽刺しは足を入れ替え左足を支えられて立つ。「お目出度やー」まで唄い終わると両足で立ち、掛け声も「ヤサネエー ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ」に替わり、扇を置き、「ヤサネエー」の

古川町も他の組同様に、お祓いが済むと御神火を受け取り、一本の松明から保駄を一つだけ外して火を点け、元の松明とともに残りの火の上に置き、後の二本も次々と重ねて置いていく。燃え上がるのを確認して、町内へ戻っていく。

なお、各組の火の点け方などは、個人の意思や癖に委ねられている可能性があり、明確な決まりごとがあるようなものではない。そうである。そのため、継承される部分と、そうでない部分がある。上記の次第は、平成二十九年に行われた鎮火祭の行事次第である。以前に見聞した時には、御神火を運ぶ風除けの燭台などには無く、神楽殿入り口の階段のところで保駄に直接火を灯していたと思われる。『報告書』の第三章、第四節、一・鎮火祭に、「祈禱が終了すると、関係者は広場に移動する。神楽殿の前で、神官が蠟燭の火を松明に移す。一名が火が点いた松明を手に持ち、走つて広場まで運ぶ。これが残りの松明に放り込まれるとパチパチと大きな音を立てて燃える。」

と記している。いずれにしても、少しずつとはいえ次第に変化していくことが、無形民俗文化財のもつ特性であると言える。

掛け声に合わせて両手を左に振り、右手を右へ大きく振つて両手を開き、振り上げる。

「ソオーラ」に合わせて両肩の位置で両掌を上下させて文台に腰掛けた腰持ちの肩で後ろに大きく反り返つて、「ヨシタ ヨシタ ヨシタ」の掛け声に合わせて、伸ばした両手の手首を煽りながら起き上がる。最後の「ヨシタ」

に合わせて手のひらを反しながら腰を屈して足のあたりである。これを繰り返して演じていく。

しばらくすると、船は掛け声ごとに左右に大きく傾けられながら進んでいく。その時鯨は、船の傾きとは反対方向へと走る。この所作を繰り返し、鯨を追い込んでいく。船を倒さず鯨を追うようになると、羽刺しは扇を手に取り同様の所作を繰り返す。最後の「ヨシタ」に合わせて、扇を半回転させる。鯨を梵天近くまで追い込んでいくと、羽刺しは再び扇を置く。そこでまた船を左右に大きく倒して演技を行い、「切るぞ」の合図で太鼓のリズムが変わり船を左右に小さく揺する。

「トーモ（鱸）リセエー ホーリヤー ホーリヤー スッテンテン」の掛け声で、鯨が反撃を開始する。太鼓のリズムも速くなり、鯨船は鯨に押されて大きく後退する。この時、羽刺しは腰持ちの肩に大きく反り返つたままとなる。



片足を上げる所作

「浮いたわいなあ」「ヤサネエー ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ」の掛け声で再び鯨を追っていく。太鼓のリズムも徐々に速くなり、追いかける速度も速くなる。追い詰めると、鯨が水面に顔を出す所作を行い、頭が持ち上がる。太鼓は「ドドドン ドドドン ドドドン」と連打に近くなり、左手で鉦を持ち、右手を後ろから前に振りながら鯨を追いかける。この後太鼓は、鉦を打つのに合わせて少し溜めて小さく叩き、羽刺しは左手で鉦を支えながら右手で鉦のものとを持ち、鯨に鉦を打ち込む。この瞬間に太鼓は「ドン」と一発大きく叩く。この時、羽刺しは大きく両腕を左右に広げ、櫓漕ぎも立ち上がり同様の所作を行う。打たれた鯨は頭を右↓左↓中と振り、その後、体を上下に揺さぶりながら前方に立ち去る。ここまですが一回の鯨突きである。

〔中島組〕

山車を曳き出すと浜まで山車を曳いて行き、町練りの準備を行う。最初に、太鼓叩きが乗り込み、太鼓のリズムに合わせて唄い手が流し唄を唄う。後から羽刺しや腰持ち・足持ち・櫓漕ぎが乗り込むと、浜からその町の提灯台へと山車を曳いて行く。

中島組の町練りは、各町の提灯台を突くことから始まる。梵天が立てられた提灯台を突き終わると、一旦浜まで戻って、そこから順番に祝儀突きや役突きを行っていく。その町が終わると、もう一方の町の浜まで行き、浜からその町の提灯台を突く。突き終わると同様に、一旦浜まで戻ってから祝儀突きや役突きを行って

いく。中島組は、本町と寺町の二町から構成されるが、どの町から突き始めるかは、毎年交代で突き始めることとなっている。「上げるぞ」の合図で流し唄から「沖の鷗に 背美は問えばーさあ 背美はくるくる のほほをえ」という役唄に替わり、北島組と同様に、羽刺しは右手一本で扇を広げて目線にかざし右足を腰持ちに支えられ、鯨を見つけた所作を行う。

掛け声が「ヤサネエー ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ」に替わり、掛け声に合わせて羽刺しは両手を左に振ってから右手を振って両腕を広げ、両掌を肩の位置で上下させ、両手を上げ腰持ちの肩で大きく反り返り両掌を前後に振り、最後は掌を反し起き上がる。この一連の動作を繰り返しながら、鯨を追いかける演技を行う。中島組の羽刺しは、片足を横に上げて周囲を見渡したり、手を左右に広げ扇子をかざしたりと、優雅に立ち振る舞うことが特徴である。

「切るぞ」の合図で太鼓のリズムが変わって船を左右に小さく揺すると「トーモリセエー ホーリヤー ホーリヤー スッテンテン」の掛け声で鯨が反撃を開始する。太鼓のリズムも速くなり、鯨船は鯨に押されて大きく後退する。この時、羽刺しは腰持ちの肩に大きく反り返ったままとなる。

「浮いたわいなあ」「ヤサネエー ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ」の掛け声で、再び鯨を追っていく。太鼓のリズムも徐々に速くなり、追いかける速度も速くなる。

追い詰めると太鼓は「ドドドン ドドドン ドドドン」と連打

となり、羽刺しは鉦を左手で支えながら右手で持ち、太鼓が連打から少し小さく叩き、一呼吸置いて、「ドン」と強く叩く音と同時に、浮いて立ち上がった鯨に羽刺しが鉦を打ち込む。打たれた鯨は頭を右↓左↓中と振って走り出し、頭を高く放り上げて、落ちてくるのを地面すれすれで受け止める。羽刺しと櫓漕ぎも立ち上がり、両手を広げる所作を行う。唄が祝い唄に替わり、羽刺しは「宮の前で鯨をついた さあこれもお宮の のほほをえ」で右手で扇子を広げ、目線にかざし、腰持ちに支えられて右足を上げて片足で立ち、左手を横に伸ばす。次の「御利生かえー お目出たやー」で左右を入れ替え、左足で立つ演技を行い、宮に感謝の意を表する。



鯨を突く様子

〔南島組〕

南島組の町練りは、一番北の南魚町から始める年と、一番南の南納屋町から始める年と交互に行う。南島組では、羽刺しの所作が同じハマの組でありながら、北島組や中島組のように、片足を上げるのとは異なり、古川町に近い踊りで、羽刺しが左右の舷側まで腰持ちに飛ばされ、舷側に腰掛けながら演技を行う。

町練りが始まると、他の組同様に流し唄から役唄に替わり、「沖の鷗に 背美はと問えば」の後、「背美はくるくる」に合わせて羽刺しは右手で扇を広げ、目線にかざし、左手は腰に当てる。腰持ちに右側の舷側まで飛ばされ、舷側に腰掛けながら見つけた鯨を見る。次に「のほほをえ」に合わせて反対の左の舷側に飛ばされ、そこに腰掛け鯨を見る。唄いも「ヤサネエー ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ」と替わり、一度目は右手を下げ左手を上げる。二度目の「ヤサネエー ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ」に合わせて、「ヤサネエー」で両手を左に大きく引いて、右手を左から右へ大きく振り両手を広げ、「ヨシタ」に合わせて手のひらを反して、手のひらを上向きにして反り返る。この間、羽刺しは腰持ちと、船中の足持ちによって支えられている。

こうして、鯨を追い詰めていくが、「トーモリセエー ホーリヤー ホーリヤー スッテンテン」の掛け声で鯨は反撃を開始し、羽刺しは腰持ちの肩を借りて大きく後ろに反り返ったままとなる。「浮いたわいなあ」「ソオーラ ヨシタ ヨシタ ヨシタ」の掛け声で再び鯨を追っていく。「サーヨーサー」の掛け声で、太鼓のリズムが速くなると、羽刺しは左手に鉦を持ち、右手を後ろから前に振り、ひらひらさせる所作を行う。鯨を追い詰めると、太鼓叩きのリズムに合わせて、羽刺しが鯨に鉦を打ち込む。

鯨を突き終わると櫓漕ぎは座り、羽刺しは初めと同じ右舷側・左舷側にそれぞれ飛ばされる所作を行う。鯨を突いた後、「治まの

お御代え」の次「アアエント エーシャエント」「エーヤツサ
エーヤツサーネー」に合わせて船を左右に三十度ほど小さく二往
復振る鱸上げの前技を行い、「いーやつさー」が其の子を伊勢の
浦へ」の次に「あーそこじゃに」で鱸を持ち上げる。

そして、「鎌倉の のをー いへい かいどうえー」と唄い終わ
る所で鱸を下ろして一回の演技を終わり、流し唄を唄いながら次
の突きの場所へと移動する。南島組では、基本的に提灯台も含め
て全て鱸上げを行うが、雨などで時間が無くなった時などは省略
して、鯨だけを突くこともあるという。全般的に、動きの激しさ、
唄いや掛け声の大きさなど、どれも南島組に勢いがあるため、南
島組が最も激しいとか、面白いと言われるのではないかと考えら
れる。



扇をかざす所作



鯨を突く前の所作

〔古川町〕

太鼓のリズムに合わせて、唄い手が流し唄を唄いながら行事
が始まる。最初に山車蔵を突き、十四川にかかる網勘橋の所で
南に向いて伊勢神宮を突き、次に山の神（大山祇神社、桜木大
明神が合祀）を突く。その後、近い所から祝儀突きを行い、最
後に中央通りの町域の一番西端で多度大社に演技を奉納する。
これが、ハマの三組の浜練りに相当するものとなっている。

古川町では、町練りでありながら、鯨が一回では突かれずに
何回も逃げ出すことと、鱸上げしたまま船体を百八十度回転さ
せることが特徴的である。

また、鯨を見つけた時の羽刺しの所作は、南島組と同様に、
腰持ちに左右の舷側まで飛ばされ、舷側に腰掛けながら演技を
行う。

練りの間、他の組と同様に、船は左右に大きく傾けて演技を
行う。この時、親鯨も子鯨も原則船と反対側に頭を向ける。羽
刺しが左手に鉾を持つて「ヤサネエー ヨシタ ヨシタ ヨシ
タ」の掛け声に合わせた所作を行うと、船を左右に半回転させ
る。それが終わると、羽刺しが左手に鉾、右手に扇を持ち、鯨
を追いかける時と同様の所作を行い、船を再び左右大きく倒
す。この左右に半回転させる演技は、他の組に無い特徴と言え
る。

「エーサヨサ」「ホーリヤー ホーリヤー スッテンテン」の
掛け声に合わせて鯨の反撃が始まり、船は大きく後退する。鯨

四、本練り

十五日には、朝から各町の氏子総代などが参列して鳥出神社の
例祭が執り行われる。本練りは、この例祭への奉納行事として行
われるものである。例祭が済んだのち、現在では宮守であった北
島組から始めて、中島組↓南島組↓古川町の順で境内に入り鯨突
きを奉納しているが、以前には境内に入る順がくじ引きで決めら
れることなどもあったようである。

『報告書』によると、開始時間は「近年では、十一時ころから
ほぼ九十分ずつの演技」としているが、現在ではだいぶ早くなっ
て九時半から始められ、鳥居前で三十分練って、境内に入り、一
時間半ほど演技を行う。

各町とも大鳥居（一の鳥居）に梵天を立て、境内の外の道路で
演技を三十分間行い、鳥居を突くことから始めるが、その突き方
も組によっていろいろと差異があつて興味深い。突き終わり、前
の組が退出すると境内に入り奉納演技を行う。奉納演技も九十分
間と決められている。ハマの三組は、本殿と蛭子社を突くが、古
川町は本殿のみを突く。

これは蛭子社が、漁業を生業としていたハマの三組にとって、
豊漁の神であるため、謝意を込めて鯨突きを行っているためであ
る。しかし、タカである古川町にとって、蛭子社は無関係なため、
鯨突きを行わないこととなっている。



練り手と鯨被りの攻防



舷側に腰掛ける所作

さらに、本練りの最中に、境内で練りを行う組と、鳥居前に来ている組とが、うまく息が合えば鳥居を挟んで掛け合いのようなことを行うことがあり、行事の見所の一つとなっている。

〔北島組〕

どの組も同じだが、まず大鳥居（一の鳥居）を突く演技から始まる。これを三十分ほどかけて梵天を立てた大鳥居を突く。

境内に入ると、二の鳥居に梵天を立てて一時間半かけて本殿と蛭子社を突く。突き終わると、鯨は頭を右↓左↓中と振って本殿に向かって捧げられる。本練りでは、町練りのように一度で鯨が突かれることはなく時間いっぱい逃げ回って演技する。



北島組 本練り

北島組の艀上げは、半円柱の木材に黒いペンキを塗った枕木を舳先にかませて行っている。これは、北島組と南島組が台船を焼津の近藤和船研究所で新装した際に、五輪だと艀上げの際に持ち上げにくい現状を改善するために行っているものがある。

〔中島組〕

大鳥居を突いてから境内に入るが、鳥居をくぐる時は「安芸の宮島」の流し唄を唄いながら入り、船には幟と吹き流しを艀立に斜めに置いて入場する。この時、羽刺しはドンザをもる肌脱ぎに

せずきちんと羽織り、立って入場する。中島組では、このドンザを羽織った羽刺しが立って入場することを「正装」と称している。そして、鯨は突かれる時、頭をほぼ垂直に立てて突かれる。突かれると、鯨は頭を右↓左↓中と振ってから二の鳥居の石段を駆け上って本殿の石段に斜めに置き、蛭子社の時は社の前の砂利の上に置く。退場時は、鯨も山車も前向きで道中伊勢音頭を唄いながら退場するが、その時羽刺しは座ったままなので「正装」ではないという。

中島組の艀上げは、「エーやつさ」の掛け声を合図に「エンヤエンヤエンヤエンヤ！」と掛け声を掛け、もう一段高く艀を持ち上げる。

中島組の練りは、他の組に比べて、優雅でゆったりとした練りが特徴であると言われている。



中島組 本練り

大鳥居を突いてから境内に入る。大鳥居を突く際には、「安芸の宮島」の役唄を唄い、所作が始まる。練りの所作に町練りとの差異は無いが、どの組よりも練りが荒々しく勇壮で、観る人からは面白いと言われることが多い。しかし、その荒々しさゆえ、鯨は壊れることが多く予め二頭用意している。

〔南島組〕

境内に入った初めのうちは、羽刺しがドンザをきちんと羽織っているが、途中からはもろ肌脱ぎになって演技し、退出する時もそのままである。

特徴的なのは、本殿を突くときは右回りで演技し、蛭子社を突く時には左回りに演技するところである。また、艀上げの直前には、山車を左右に小さく振って、「そこじゃに」の掛け声とともに艀を持ち上げる。

南島組のこだわりは、神に対して背を向けないというところで、演技を終えて境内を出る時には、舳先を本殿の方に向けて出て行き、そのまま通りを後ろ向きに曳いて行き、中央通りで曲がるまでそのままで行く。大四日市まつりに出てくるときでも、諏訪神社にも尻は向けないようにしている。

なお、南島組では、本練り終了後、地域貢献という観点から、浜練りの前までに富田浜病院で、入院患者などの慰問のために、鯨突きを披露することもある。



富田浜病院 慰問鯨突き



南島組 本練り

〔古川町〕

同じく大鳥居を突いてから境内に入るが、古川町では「千鳥に練る」と言って、左右両方向に三回ずつ回す演技を行ってから鳥居を突く。また境内に入場するときは、幟と吹き流しを船尾に差して、鳥居に当たらないように斜めにして入場する。この演技は「トオ モリセー」で鯨の反撃に遭った時にも三回ずつ回して後退する。境内に入ると幟と吹き流しが外され、羽刺しがドンザを着る。

艀上げでは、町練りの多度大社を突く時と同様に、艀を持ち上げてから時計回りに百八十度回転させる。退場の際には道中伊勢音頭を唄い、鯨船は船首から退場するが、鯨は大鳥居の前で頭を本殿の方に向き直って、後ろ向きで大鳥居をくぐって退出する。古川町は全てが終わって山車蔵へ戻ると、町練りの始めと同様に山車蔵を突いて終了する。



古川町 本練り

五、浜練り

東富田には元々の浜があつたが、伊勢湾台風後、国道23号線が防潮堤を兼ねて建設されて以来地域と海岸とは分離され、海岸は埋め立てられコンビナート化が進められた。浜練りは、ハマの三組が本練りの済んだ後、終えた組から順に浜で行われていたものである。現在は、国道23号線の西側に砂利敷きの僅かに残る広場を浜と称して、そこに面した通りで行われる演技を意味している。但し、北島組だけは一番東の砂利敷きの広場が海産物の加工などに用いられ、そこに面して家屋を含む建物が存在しているため、直接浜に面する通りではなく、その家屋などを挟んだ一本西側の通りで行われている。



北島組 浜練り



中島組 浜練り



南島組 浜練り

〔北島組〕

演技自体は本練りと変わらないが、北島組の場合は伊勢神宮を突いてから多度大社を突いて演技を終える。ただし、伊勢神宮を突くのは浜練りを行う通りの南端になるが、その場所がクランクになっているため、鯨船の演技のしやすい少し手前に梵天を立てて演技を行っている。

〔中島組〕

町域は、本町と寺町の二町だけであるため狭く、浜練りにも影響を及ぼしている。町域の東端の通り（浜）の二町分だけでは突く距離が短いため、練りが本町の通りと浜の両方を使用するという、他の組には無い変則的な練りとなる。

なお、伊勢神宮を突く時は、浜通りの寺町と南魚町の境界杭に梵天を立てて突き、多度大社を突く時は、本町通りと浜通りが交差する杭に梵天を立てて突いている。

〔南島組〕

伊勢神宮から多度大社の順で鯨突きを行うが、ハマでは南島組が本練りの最後であるため、浜練りの開始も最後である。この組の浜練りは元気で鯨はよく逃げる。特に多度大社の鯨突きは、練りの最後であるため、勢いよくかつ長い時間浜練りが行われ、延々と続けられることが通例のようである。

六、宮参り

ハマの三組では、浜練り終了後、山車を山車蔵に収蔵して練りが終わりとなる。中島組では近年の習わしとして、全てが済んだという意味で太鼓を「ドン」と一発叩く。古川町では全ての通りに顔見世して山車蔵で一度突いてから山車を納めて練りが終わりととなる。練りを終えると、本練りと同じ順で「宮参り」を行う。

宮参りとは、鳥出神社本殿に、行事を無事に終えたことの報告とお礼の意味を込めて、参拝するものである。各組とも境内までの道中は提灯を手に、太鼓を叩き、伊勢道中音頭を唄いながら参内する。その際、鳥居前あたりまで来ると肩を組み、輪になってぐるぐる回る所作を行い、それを繰り返しながら境内へと進む。進み方としては、三々五々参拝する組や駆け込む組、全員が同時に参拝する組など、各組毎に違った特徴がある。

宮参りが行われる時間は陽が落ち、提灯を提げた状態が良い雰囲気となってくる。南島組や、最後の古川町が参る時刻にはすっかり陽は落ち、漆黒の境内に関係者の持つ提灯やライトの光だけが頼りとなるので、各組ごとによって宮参りの光景は大きく違った印象を受けるものとなる。

〔北島組〕

締太鼓を竿に提げ、道中伊勢音頭を唄いながら参宮し、途中何度も肩を組み（両手で隣の者の帯を掴み）、輪を組んでぐるぐる回

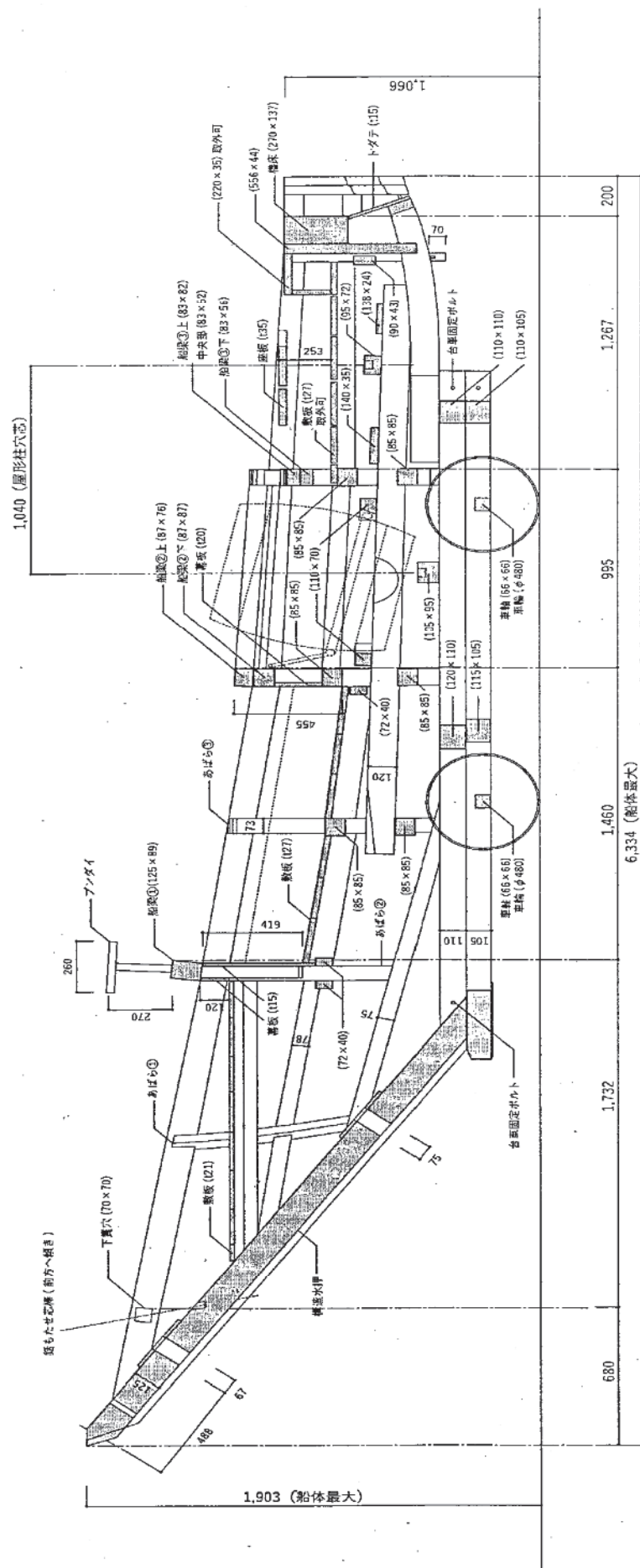
り、切り替えて反対回りをする所作を繰り返しながら参内する。鳥居前や、境内に入っても同様の所作を繰り返しながら、全員で本殿参拝を行う。これで全ての行事が終了となる。

〔中島組〕

役人が手提灯を持ち、町ごとに竿に提げた締太鼓を叩きながら、道中伊勢音頭を唄い鳥出神社に向かう。途中、青年を中心に肩を組んで円陣を作り、ぐるぐると回る所作を繰り返しながら参内する。鳥居前や、境内に入っても同様の所作を繰り返す。拝殿の手前まで来たら円陣を解き横一列になって、「エンヤーエンヤー」と掛け声をしながら拝殿に入る。参拝を各自で済ませて全ての行事が終了となる。

〔南島組〕

南島組は、日暮れとなるため、中島組同様に町ごとに、役人が手提灯を持ち、締太鼓を竿に提げ、叩きながら道中伊勢音頭を唄い参内する。鳥居前付近からは、青年を中心に肩を組んで円陣を作り、ぐるぐると回る所作を繰り返しながら、境内に入る。拝殿の手前で円陣を解き、各々で拝殿に参拝する。原則は町単位であるが、祭りの仲間同士であるため、境内では相互交換をしながら円陣を組むこともある。参拝は町単位で行われ、役人に続いて三々五々参拝する。



北島組 台船



南島組 宮参り



北島組 宮参り



古川町 宮参り



中島組 宮参り

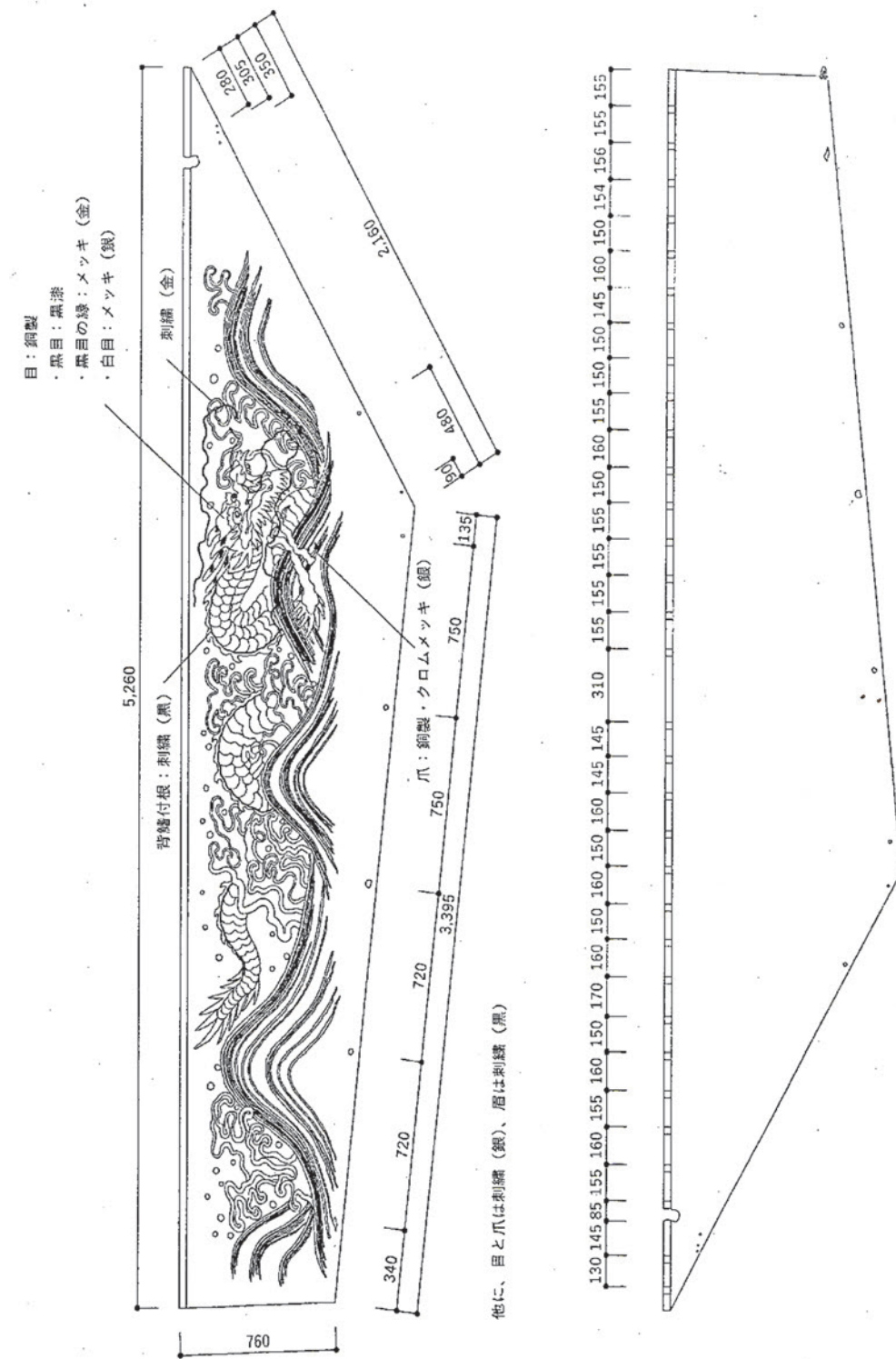
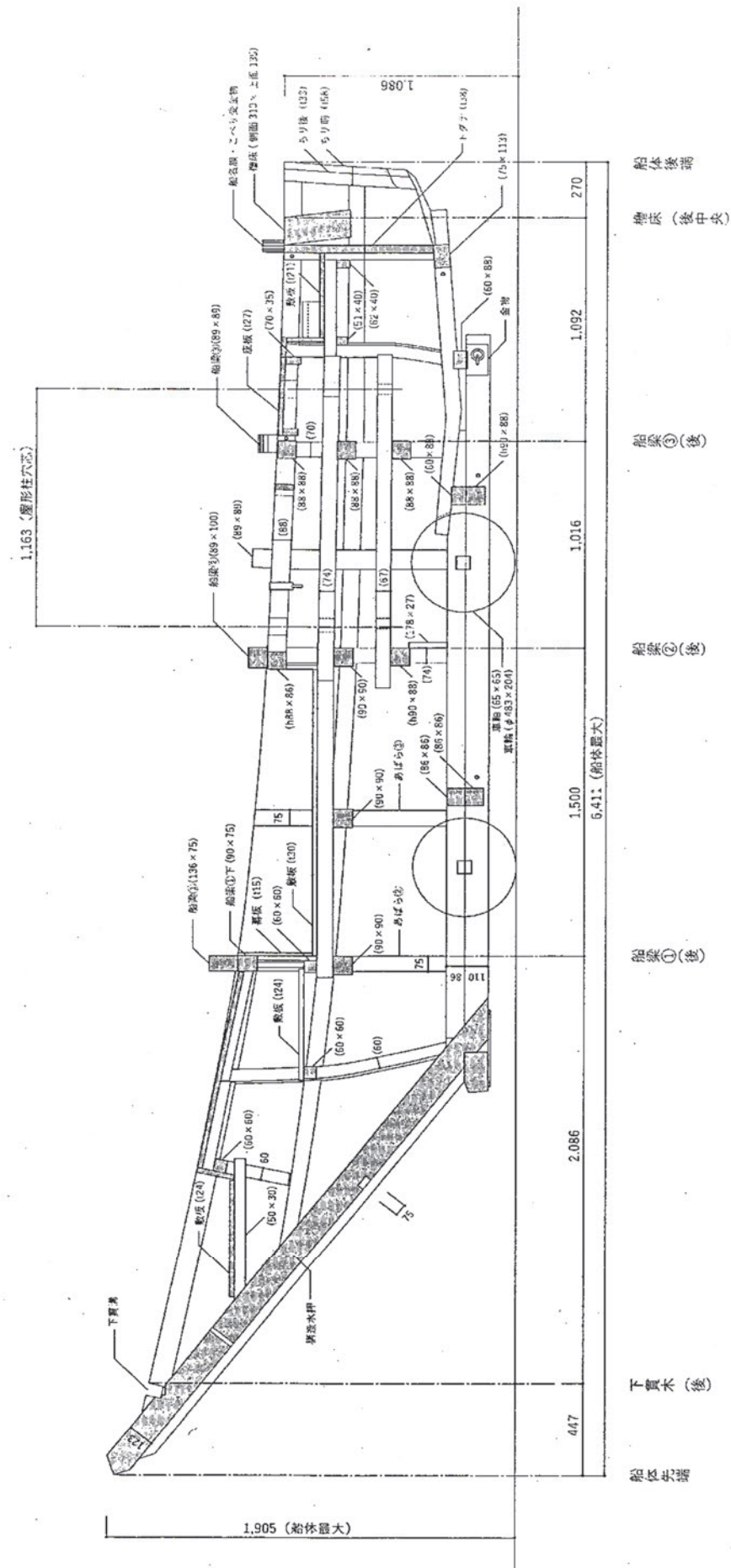
〔古川町〕

ハマの三組とは異なり、古川町だけは、長胴太鼓を竿に提げて参内する。役人が手提灯を持ち、太鼓を竿に提げて叩きながら、道中伊勢音頭を唄う。鳥居前付近から、肩を組んで円陣を作り、回りながら境内に入る。子どもたちも多く、大人の真似をしてくる。これですべての鳥出神社の鯨船行事は終了となる。

終わりに

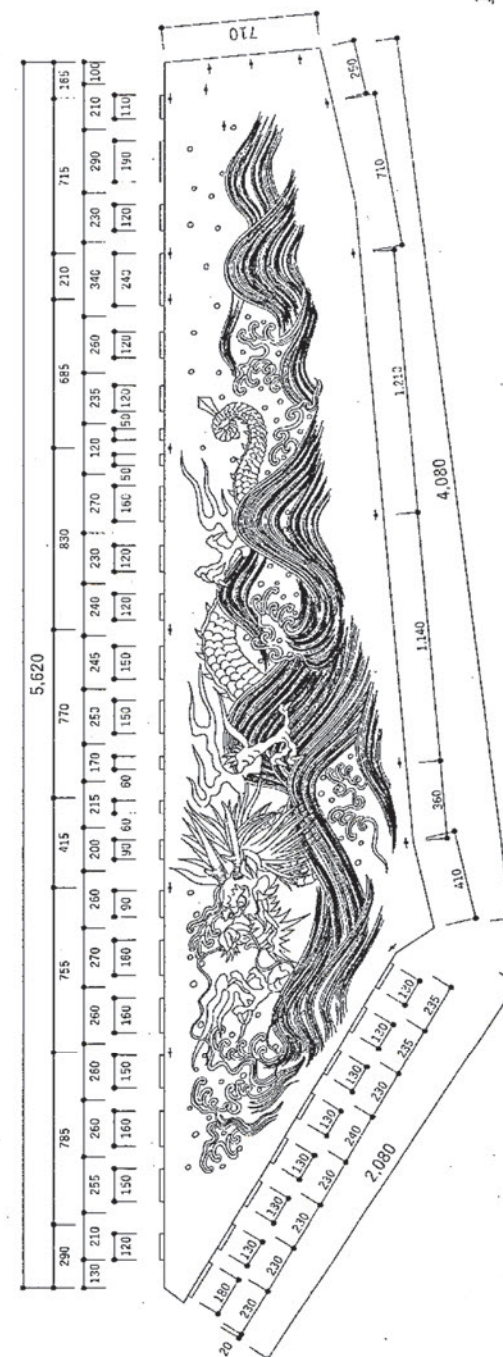
平成十四年の実施調査をまとめた『報告書』の刊行より二十一年の歳月が経過した。本書を刊行するにあたり、平成から令和へと時代の遷り変わる時期に行われていた行事の内容を改めて調査を行った。その結果、市民の祭り離れや、少子高齢化による担い手不足など、伝統行事が継承されていくことが難しくなっている状況が見えてきた。

本書を、伝統行事継承の一助となるべく活用いただければ幸いである。そして今後も、継続した調査を計画することで、伝統行事の継承に資することが期待される。

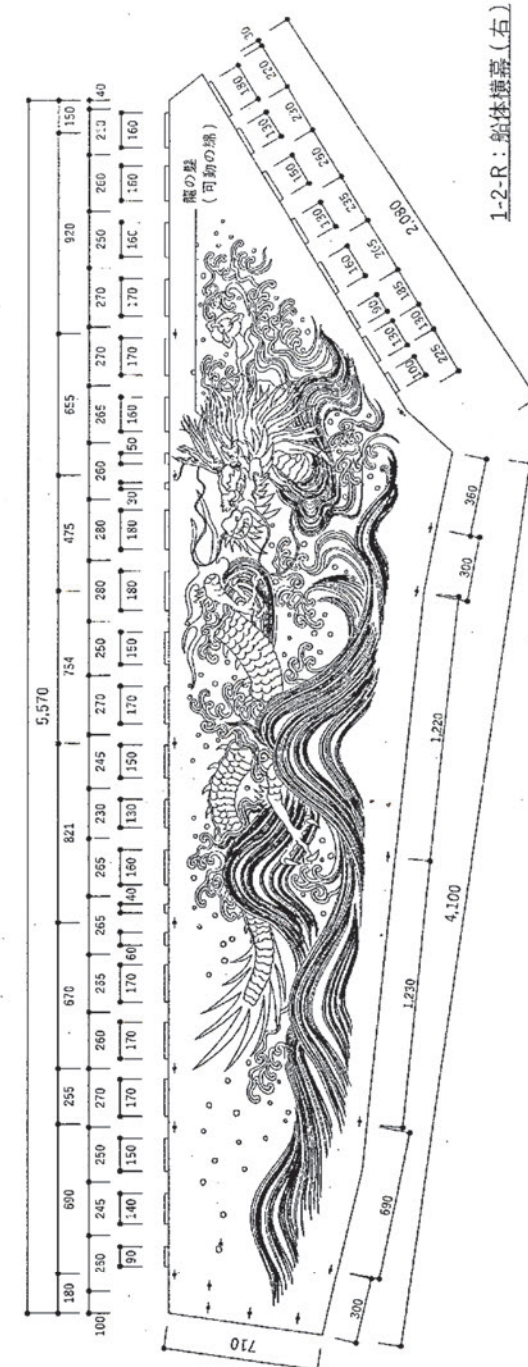




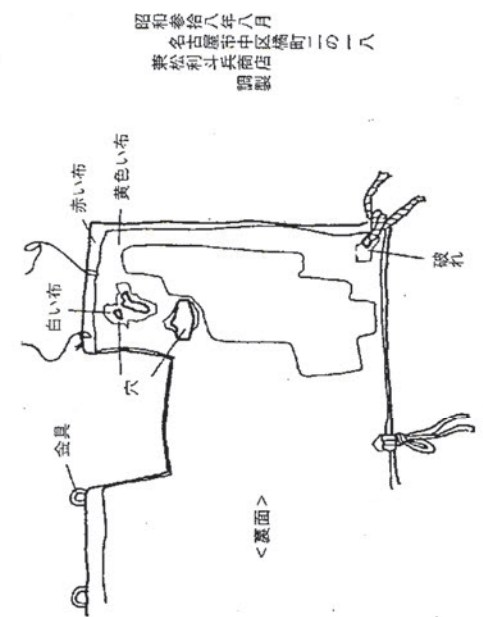
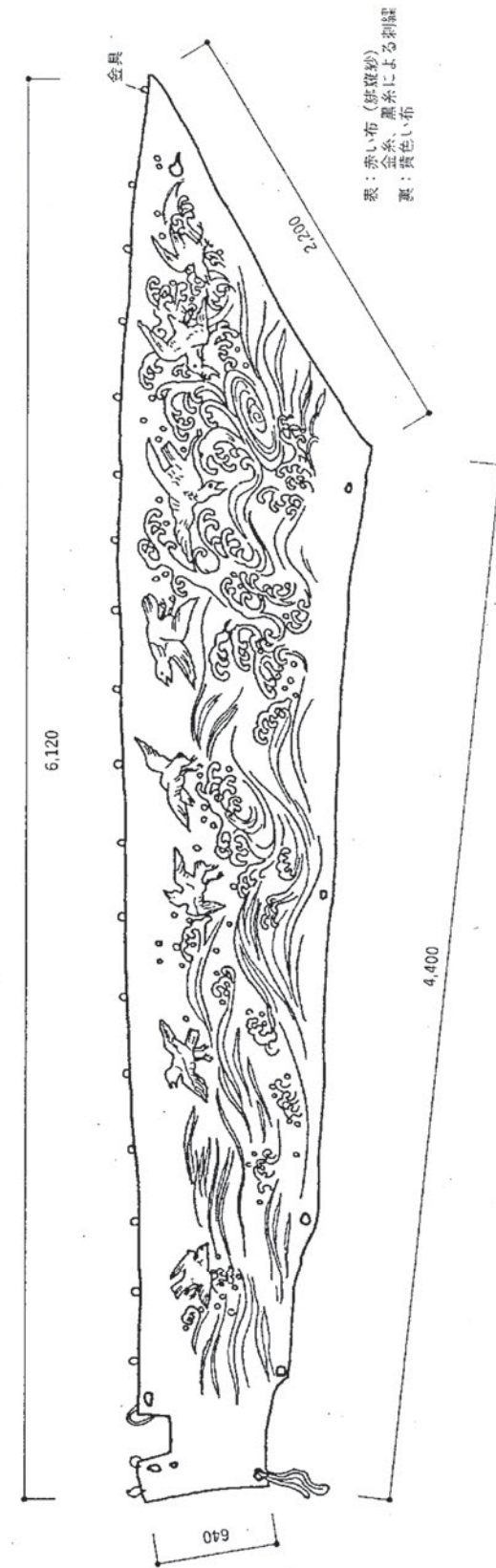
1-2-L: 船体横幕(左)



南島組 横幕



1-2-R: 船体横幕(右)



1-12-2: 船体横幕 (右)

ユネスコ無形文化遺産・国指定重要無形民俗文化財
「鳥出神社の鯨船行事」調査報告書

編集・発行：四日市市シティプロモーション部文化課

印刷：フコク印刷工業 有限会社

令和6年3月発行

PDF作成：令和6（2024）年3月25日

作成者 四日市市シティプロモーション部文化課